
キャシードラル・スクエアによろしく -New Zealand Dream-

神狩アイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キャシードラル・スクエアによるしく - New Zealander Dream -

【Nコード】

N8050K

【作者名】

神狩アイ

【あらすじ】

日本の裏側、ニュージーランドのクライストチャーチ。なりゆきで留学してきた杉山新夢は、スポーツマンのニルス、義足のアリシアと共にのんびりキャンパスライフを謳歌していたが、目先のことにすら興味がなく将来も考えられず、怠惰な生き方をしていた。留学そのものに価値を見いだせず、迷い、迷って、見つけ出したものはまだ何も、ない……。ニュージーランドの大自然と温かい人々の心に、文字を介してでも触れていただけたら幸いです。 ■ クライ

- ストチャーチ大震災のすべての犠牲者のご冥福をお祈りいたします
-

1 シティ・セントラル

校舎の南側に位置するカフェテリアで朝食を選んでいると、オール・ブラックスのユニフォームに身を包んだスポーツ系体躯の男に声をかけられた。寮の隣室のニルスが、心外だと言いたそうな表情で僕を見ていた。

「もう風邪は大丈夫なのか？　ここ一週間ほど、授業に顔を出さなかっただろう。みんな心配してたぞ」

彼の持っている大きめのプレートには、フレンチトースト、ベーコン、卵、サラダ、シリアルのヨーグルトかけ、ジュース等がたっぷり乗っていた。さすがは白人。弱輩なアジア・モンゴロイドの僕には信じられない量だ。

僕は曖昧に「平気」とだけ答えた。

「季節の逆転ぐらい、数年もいれば何とかなれると思ってたけど、甘かったな」

「まあ、あと一年だけ頑張れば済むさ、アラン。それまでは、あんまり大きな病気にかかるんじゃないぞ。レポートが追いつかないからって徹夜とかしてみろよ、一発で病院送りだ」

「貫徹なんかしないって。俺、しっかり睡眠とらないとすぐ昼の二時台アウトな人間だし」僕は肩をすくめて苦笑した。「レポートももう終わったよ」

「じゃあ、明日の授業は出るのか？」

「一応ね。長く欠席するのも問題だし、先生にも心配かけてられないから」

僕は一週間前、夜中に高熱を出した。日本とは季節の流れも湿度も全く違うニューヨークで、旅行者などが軽い風邪にかかるのはよくある話なのだが、僕の場合、深夜までテレビを見ながら宿題やレポートを片付けていたのが失敗だった。なかなか熱は下がらず、大学の講義を五日間休み、寮のベッドの上に寝そべってMP3で大

好きな坂本龍一を聴いたり、ペーパーバックを読んだりして過ごした。

僕はカフェテリアに横付けにならんだ具材からいつもと同じメニューを皿に盛り、ジャケットを置いて場所取りしていた席に戻ってニルスと一緒に食べた。まだカフェテリアが開いたばかりの時間でそれほど混雑しておらず、人気のホットチップスやフルーツヨーグルトなどが山積みになっていた。

「で、どうするんだ？ 今日には」ニルスがシリアルをスプーンですくいながら言った。「せっかく日曜日にタイミングよく風邪が治ったんだから、アカロアあたりに遊びに行くか？」

てんこもりのシリアルを口に運びながら遠足前の小学生のようにはいでいるニルスの言葉に、僕は軽く首を振った。

「バスで行ける範囲内で、その辺をふらついてくるよ。買いたいものもあるし、寿司屋にも行きたい」

「アランって、こっちに来ても日本食、食べてるんだな。寿司なんてその辺にレストランが並んどるとはいえ、結構高いのに」

「日本人たるもの、米なしじゃ生きていけないんだよ」

その溜息交じりの僕の言葉に、「そんなもんなのか」とニルスはスプーンを口に銜えたまま呟いた。僕は「そんなもんだよ」と返事をする。彼の英語はニュージーランド訛りが人一倍強い。その喋り方に慣れるまで、随分と時間がかかった。この国に来て最初に仲良くなったニルスに協力してもらって、夜中にリスニングの練習に励んでいたこともある。アメリカ英語を学んできた僕にはかなり酷だったが、今では彼の訛りにも十分ついていけるし、むしろ僕も自然と標準英語を喋れなくなっているぐらいだ。

頭一つ分身長の高い彼は実年齢より大人びて見え、綺麗に切られた髪は先天性のブラウンで少し傷んでいる。体格も顔立ちもがっしりしていて、今ならアクション映画のスタントでもこなせるかも知れない。そんなニルスと貧弱な日本人の僕が並んでいると、ターミネーターと若きジョン・コナーのようだ。実際、この三年間ほとんど

離れることのない、互いの長短所も知りえた者同士、どう見られようがさほど気にならない。

ニルスの食事の半分以下の量しか食べなかった僕は、「シティセクターに行ってくる」と彼に告げて早々に立ち去ろうとした。

「シティなら、俺も昼過ぎぐらいに行く予定だ」

僕は肩越しに少しだけ振り返って笑い、「偶然だね」とだけ答えた。感情表現は豊かな方ではない。ニルスと一時半に寿司屋で会う約束をして、プレートと食器類をワゴンに放置し、カフェテリアを出て寮へ戻る大学構内の道を戻っていった。十一時頃に出発しよう、と適当な予定を頭の中で組みながら。拍子抜けするほど軽いカフェテリアのドアを押すと、冬の乾いた風が吹きこんできた。

可愛い鴨の親子が一行に並んで闊歩する豊かな芝のグラウンドを走りぬけると、他の寮生が各々の日曜日を楽しむためにラグビーボールを蹴っていた。大学の裏手のガードレールを軽々と飛び越えると、すぐにメトロが来た。メトロはこの町一帯の住民の足となっているバスだが、ニュージールランドの公共交通機関は平気で到着時刻が前後十分以上も早かったり遅かったりするから、時刻表通りになかなか事が進まない。日本のように秒刻みで電車が動く方が世界的には珍しい。

運転席の隣にある投入口に硬貨を投げ込み、レシートを丸めてポケットに押し込んだ。アナウンスも無くドアが閉まり、バスが急発進する。ニュージールランドのバスに乗ると、バス停名などのアナウンスが一切ないので、僕も来たばかりの頃は随分苦労した。ブザーを押すタイミングを逃すと運転手は何も知らずにどんどん先に進んでしまう。

僕は後ろの方に空いていた席に座り、息をついた。隣にいる中年の男が読んでいる新聞には、北半球のどこかの国で起こった大型ハリケーンの記事が大きく一面扱いになっていた。足を組み、窓ガラス

に頭をもたせる。

乱暴な運転をするバスに揺られ、僕はぐつと眉をひそめた。外の景色をぼんやりと見ているだけでは、この不快感は拭いきれない。

僕はいつまでたってもバスに慣れない。ニュージージラランドには民間用の電車が存在せず、交通機関はもっぱら車とバスなのだから、どこかへ行こうと思えば車を持たない僕はバスを利用するしかない。ただど座席に座ると思いい出してしまふのだ。

ここに来てからまだ一ヶ月も経っていない頃、乗っていたバスが事故に遭った。急ブレーキと、ぐらりと左にカーブして傾いだ車内。崩れる乗客。体中を打った痛みや自分の短い悲鳴を、まだはつきりと思いだせる。一般の乗用車と接触事故を起こしそうになったバスに運悪く乗ってしまった僕は、他の乗客に混じって転がるように外へ飛び出し、避難した。相手の乗用車は左へ大きく切り返し、民家のレンガ塀に突っ込んで大破していた。事故に関する警察の質問を英語で受けたのもその時が初めてだった。十九歳になったばかりの秋のことだ。

あれから二年間、遠出する用事がある時にバスを必ず利用しているが、座席に座るとどうしても事故のことを思い出してしまう。プレスに大きく扱われる事もなく、近所でひと騒ぎしてすぐに忘れられてしまった程度のローカルな事件だったから、未練がましい僕はたまに友達に「よっぽどのチキンだな」とからかわれる。バスが傾いたり揺れたりするたび身を強張らせる僕を、わざと驚かせる非情な奴もいる。

どこまでも続く緑の町並みを、僕はじつと見ていた。故郷日本よりずっと自然に溢れている。こんな静かな場所で破壊音が響いたから、それは大変な騒ぎだったろうに。どこの家も庭が広く、公園が野球場ほどの大きさを持ち、美しい川が流れるこの町を選んだのは、一体いつだっただろうか。「クライストチャーチが僕を呼んだんだ!」なんてジャンヌ・ダルクめいたことは微塵も思わなかったが、流れにまかせて辿り着きめぐりあわせて暮らし始めると、ほとんど第二

の故郷と言えるほど愛着を持ってしまった。

そこでいきなり起こった交通事故。ただでさえスピードを出しすぎるニューヨークのドライバーたちなのだから、死者が出るのも当然と言えば当然だ。事故で死人が出た町。そんな息も詰まる密閉された血生臭さを、今は微塵も感じない。

友達の家やいつも見かける小学生の集団を何度も目にとめ、まるでとり付かれたかのように窓の外を凝視する。窓枠にはカラフルなサインペンで無数の落書きがあった。ぼんやりしているうちに景色が少しずつ住宅街から活気付いた町並みに変わり、シティが近い事を知って膝の上で拳を軽く握った。

町から少し離れた場所にあるメトロステーションに入ったバスは、暗いトンネルのスロープをゆっくりとターンしながら回り、次にアイラム行きのバスに乗る乗客が並ぶ乗り口前で停車した。僕は一番にバスを降り、待合室の無数の椅子の間を突っ切って外へ出た。ぱあっ、と顔を照らす日の光。活気があるからかどうか分からないが、この辺りは比較的暖かい。着ていたパーカーの前ファスナーを全て開け、ワゴンセール中のCD屋や鉄板焼きのレストランを横目にコロンボ・ストリートを北へ向かった。圧倒的多数の白色人種で騒然としているストリートは、世界の悲惨さなど誰にも感じさせないまま霧の向こうへ内包してしまうような、そういう意味での活気と明るさがあった。もう長く住んでいる僕にもどうにも理解しがたいこの自然な催眠術。それに気づかないだけだ。

クライストチャーチの中枢部であるシティには多くの国籍の人間が混沌としていて、パントやトラムの通り道の内側に五大大陸の人種がごちゃっと集まっている。僕のような黄色人種はどこにでもいるし、言語なら何十カ国分もの言葉があちこちで話されていそうで耳を傾けるのが怖い。大阪屋や寿司屋などの日本料理店で日本人に遭遇する事は何度もあり、それだけ日本人が多いことがうかがえる。この

町にたむろっているニュージールランド人と同じほどのエトランゼがひしめき合っていて、鎖国の名残りのように現代でも未だに「外人」が排他的に扱われる日本とは大きく違う。

僕はこの町が大好きだ。シティや大学や壮大な自然がある、このクライストチャーチの地が。あと一年で日本に帰ってしまうことが名残惜しいぐらい、気に入っている。できることならここに永遠に住み続けていたいぐらいだ。

僕はシティの中心広場、キャシードラル・スクエアのど真ん中に立って、高さ十メートル以上はある巨大なガラス（に、見えた。僕には）のオブジェを見上げた。逆三角形で、青く美しい光を乱反射している。初めてスクエアに来た時は観光客丸出しで写真を撮りまくっていたのだが、二年もいるとさすがに見慣れる。相変わらずの美しさを放つオブジェを横目に、スクエアの端に停車しているホットドッグ売りのワゴンに駆け寄った。運転席側の売り場で、ニルスと同等に張り合えるほど体格のかい男が鉄板相手にソーセージを焼いていた。

「アレンじゃないか、しばらくぶりだな」

寒さに負けない明るい挨拶に、僕は笑顔で答えた。彼はこのスクエアですっとホットドッグを売り続けていて、子供達からはレックスの愛称で慕われている。僕にとっては、ニュージールランドに初めて来た頃からの、年の離れた友人という感じだった。

英語圏の人間には難しいプロナウンスを持つからか、みんな僕の名前をそれぞれ思い思いの発音で呼ぶ。ニルスはアランと呼ぶし、レックスに至ってはこの調子だ。本当の僕の名前を正しく発音できるニュージールランド人は少ない。

「風邪、ひいてたんだ。熱出してさ」

「そりゃご苦労さん。珍しいな、お前が病気だなんて」

「悪かったな。勉強のしすぎだよ」そう言つとレックスが鼻で笑ったが無視する。「課題のレポートがなかなか仕上がらなくて。徹夜したらあのさまだよ」

談笑している間にレックスはあつあつのソーセージ入りホットドッグを紙に包んで手渡してくれた。いつもここに来るたび同じものを注文しているので、すっかり覚えられてしまっている。軽く暖房がかかっている車の中に入れさせてもらって、レックスの隣にある具材が詰まったボックスの上に浅く座ってホットドッグを食べた。運転席の窓から見えるスクエアの様子をじっと見ながら、寒くないのと訊ねた。

「これだけ色んな具を直接鉄板で焼いていれば、寒さなんて分からなくなるさ。もっとも、夏は死ぬほど暑いけどな」

ああ分かる、と答えるとレックスは無精ひげを生やした顎を震わせてけけら笑った。パツと見はいかつい、日本で言うところのちょい悪オヤジなルックスだが、根は仲間想いで親切だ。売り場の手前には大きな鉄板がずらりと並び、レックスはその上で毎日ソーセージや肉を焼く。その巨体の下にかなりの根性と持久力も据わっているようだ。夏場の彼はTシャツのままシャワーを浴びてきたんじゃないかと訊ねたくなるほど、全身汗でびしょ濡れなのが常だ。

大変な仕事してるんだな、とホットドッグにかぶりつきながら呟いた。少し焦げたソーセージが美味しかった。

「そうでもないぞ、仕事が好きだから辛くてもやっていける。仕事のせいで失うものも何もないし。未成年のお前には分からないだろうがな」

「俺、とつくに成人してるよ」何かついてる、と感触で分かった僕は親指で口の端についたケチャップを拭いた。

「本当か？」

「本当。もう二十一歳だよ。言わなかったっけ」

レックスは慌てて指折り数えた。間違いに気付くとのけ反って高笑いしながら「参ったなあ、アレンもそんな年か」と言った。

「初めて来た時は英語なんてろくに喋れない子供だったのに、ビールが飲める年頃になったんだな。今こうやって、何の苦もなく喋ってるのを考えると、上達したな、アレン。二年間、このクライスト

チャーチで頑張ってきた甲斐があったらう」

まるで父親のように僕の頭をキャスケットごしに乱暴に撫で回す。言葉のことも、ここら一帯の地域のこと、レックスには何度も教えられて世話になっている。こんな事をされても格別嫌な感じはしないし、むしろ上達した事を褒められて素直に嬉しかった。

ホットドッグを食べ終わったあとの包み紙を彼に手渡し、礼を言つて車を出ようとしたところでふと思い当たり、車の販売窓から身を乗り出して訊いた。

「レックス、今日、アートセンターにアリシアは来てる？」

「ああ、いるはずだ。今日は夕方まで残るらしいから、会いに行くならのんびりでも構わないぞ」

ありがとう、と再度礼を言つて、スクエアを突っ切つて行つた。スクエアの広場内には、大きなチェス盤と巨大な駒があり、それを両手で持ち上げてプレイしている男が何人かいた。港の方から来た海鳥や無数の鴨が、住民の食べ物残りの失敬しようとうろろしている。トラムの発着所には人が列を成し、コーヒーカーフェ前のテラス席ではカップルや親子が日曜の正午を楽しんでいた。

多くの国の人が行き交うシティ。クライストチャーチの中心街なのにそれほど高い建物は存在せず、日本なら小さな駅前通りぐらいにしか分類されない町並みだが、ここでは日々の疲れやストレスが癒される。木々や芝生が目立ち、川は日本のそれより遙かにすきとおっている。大学の寮からバスで十五分ほどのこの町が、休日には必ず足を運ぶほど気に入っていた。

これが、クライストチャーチが“ガーデンシティ”と呼ばれるゆえん。

僕はアートセンターに向かおうとした足を止め、ふと振り返つた。首都ウェリントンの二倍近くの人口を誇る南島観光の拠点地、クライストチャーチ。その最大シンボルとなっている巨大なキャシードラルが、美しい風貌と神々しさを周囲に振りまいて、堂々と立っていた。この町の目印になっている大聖堂で、正面左側にある大きな

塔はこの町のどの建物より高い。入り口になっている聖堂の少し上の位置にある丸い大きな窓と、正面の頑丈な門がいつ見ても迫力があり格調高い雰囲気漂う。まるで十九世紀のヨーロッパがそのまま凍結しているようだった。僕はこの大聖堂の日本語の呼び方が分からないので、耳で聞こえたとおりに勝手に勝手にCathedraleキャシードラルと呼んでいるが、事実フランス語ではCathedrale、イタリア語ではDuomoドゥオモ、英語でも地方の訛によってカシードラルなど色んな風に聞こえる。

「キャシードラルって、羊に次ぐニュージーランドの象徴ですよね！ この綺麗な建物の造りといい、流れてくる聖歌といい、最高ですよ」

初めてこのキャシードラル前に立った時、つたない英語で通行人にそう叫んだのを覚えている。人々は変な観光客を見るような目で通り過ぎていったが、それぐらい、感動していた。今思えば羊をニュージーランドの象徴と呼ぶのは典型的な観光客のセリフで凄く恥ずかしいのだが。

クライストチャーチと聞けばどこの国の人間でも大概このキャシードラルが真っ先に思い浮かぶ。日本にとっての東京タワーと同じくらい有名なシンボルだ。僕は何度もこの塔に登り、礼拝に参加した。美しい聖堂内部の教会は神秘的な装飾品と淡い光を放つ蝋燭に包まれていて、十字架や銅像が一層神々しく見える。この場所が大好きで、このクライストチャーチの町が大好きで、そしてこのキャシードラルを安息の地として認めた。ここにいれば心が落ち着く。僕は今まで何度も、キリストの像の前で物思いにふけていた。

時計を見た。一時を少し過ぎた頃。アリシアの様子を見に行くのは後にしよう、と決めて駆け出し、ニルスと落ち合う約束の寿司屋に向かった。

2 ともだち

最初は一年間だけの留学のつもりだった。日本で外国語大学に入り、その留学プログラムでどこに行けばいいと思っていたが、気がつけば自分の決心も曖昧なうちに、遙かニュージーランドのクライストチャーチにある大学への入学が決まった。今年で三年目を迎え、上手くいけば来年の夏ごろには卒業が決定する。

高校ではたいした成績は残せず、英語だけが唯一得意だった。それは洋画をよく見ていたからだとか、故郷神戸は外国人観光客が多いからだとか、一番それっぽい理由で坂本龍一に憧れたからだとか、あとからいくらでもこじつけられる理由がある。だが明確な言い訳は見つからないままだ。

しかし英語以外は赤点ばかりで、僕の成績を見るに見かねた教師一同は外国語大学への進学を勧めたが、どうしたものか、気がつけば海外の大学への入学を決めていて試験も比較的あっさりと合格したのだった。友人たちはこぞって祝福してくれたが、どうにも素直に喜べない自分が確かにいた。

何故そうなったのかは今でもはっきり覚えていない。親がそうさせたのか、当然の成り行きだったのか。ともかく、僕は十八歳の春先、十三時間ものフライトを経て一人でニュージーランドにやってきた。最初の印象は「空気が乾燥しすぎて」「コレステロールでいつか死ぬ」「オゾン層がないっていうのが立っただけで分かる」だった。大学の寮で生活するようになり、授業を受け、放課後には付属の英語学校で留学生と共に英語を学び、毎日が課題と英語に追われる日々になった。

まだ英検二級レベルの英語しか喋れなかった当時の僕をリードしてくれたのが、寮の隣室の住人ニルスだった。初めて寮に来た時に、ドアを全開にして荷物を部屋に運び込んでいたところを彼が手伝ってくれたのが仲良くなるきっかけだった。ラガーマンでやたらと体

格がでかくせに、服装やアクセサリーはお洒落で派手な奴だ。僕を茶化してばかりの性格はこの頃から変わっていない。

「お前、チャイニーズ？ あ、ジャパニーズなのか。わかんねえな、アジア人って、見た目で区別つかないから。留学生？ つか、細いなあ、お前」

全く遠慮会釈なくネイティブスピードでべらべら喋るものだから、彼との出会いはきついニュージールランド訛りの英語に初めてぎりぎりと言を締められた瞬間でもあった。その時どうにか僕がひねりだした返事は「この学校に入学してきた」ということだけで、あとはさっぱり会話になっていなかったのを覚えている。それ以降、ニルスは僕と親しくしてくれて、生まれて初めての海外生活に右も左も分からなかった僕に色んな事を教えてくれた。町を案内してくれて、ニュージールランドの有名人や音楽、文化の事も彼に教わった。英語学校の授業のおかげということもあるが、僕が二年間で自分でも驚くほど英語を上達させたのは親友ニルスの存在があったからかも知れない。

どうにか二年間の必修コースを特に単位を落とすことなく全て修了した僕は三年生にあがる事が出来、一歳年上のニルスは本来なら卒業するはずなのにもっと勉強したいと言って大学に残っている。ここでは六年以上も在学している勤勉学生も珍しくない。

三年で卒業する事が決まっている僕は、その後日本に帰るかここに滞在して就職するか選ぶ事が出来る。どちらにしても同じような道を辿るのだろうと思うているが、日本に残してきた両親にも会いたい、でも大勢の友達とは離れたくない、という両者の気持ち揺らいで優柔不断になっている。それはまたいつか考えよう、などと悠長な事を言つてのんびり構えている僕は未熟だ。意識的に泥水の中で生きている。僕は、けれど蓮の花にはなれない。

約束の時間を盛大に過ぎ、ニルスは遅刻してきた。

「おかしいな、俺の時計、三十分も早いのかな」

袖を捲って腕時計のフェイスを指先でこつこつ叩きながらそう皮肉を零すと、ごめんごめん、とニルスは精一杯背をかめて隣の隣の席に座った。そういう所作の一つ一つが僕の影響なのかどうも日本人臭い。カフェテリアで会った時のユニフォームと違う服装で、ピアスやらゴツい指輪やらをこてこてとつけている。毛先を少しワックスで遊ばせた髪をきれいに整えていた。

僕のお気に入りの回転寿司の店で、シティに繰り出した時は大抵この店でお昼御飯を食べる。ニュージールランドでは、ロウフィッシュのみならず寿司には絶対合わないアボガドや野菜全般が平然と巻かれているので勘弁して欲しい。世界にはイチゴを巻く寿司もあるらしいからそれよりか幾分マシだろうが。

ニルスは醤油を出す小皿を用意しながら、昼寝してた、と言い訳を垂れた。

「どんな時間に昼寝してるんだ、お前は。それは昼寝じゃなくて二度寝って言うんだよ」

「ラガーマンは日常が体力と睡魔との勝負なのだ」

「ニルジー、そろそろラグビーと勉強を両立させるの、やめなよ。」

将来、別にカンタベリーに入るとか、そんなんじゃないだろう？」

ニルスは寿司をコンベアーから一気に二皿も取り、じゃないんだけどさ、と口ごもりながら言った。ラグビーはニュージールランド最大の国民的スポーツだ。イギリスの植民地だった過去がある故ゴルフの人気も高いが、プロの試合などで連日視聴率を陣取っているのは圧倒的にラグビーである。カンタベリーはこの地域ごひいきのチーム名で、そこに僕らの大学のプロフェッサーの息子がいることから生徒の多くが試合の中継を見ている。

ニルスは選手を目指しているわけでも無いのに、小さい頃から今まですっとラグビーをしていて、大学で経済を勉強しているのにやめる気配はない。

「そんなに好きなわけ？ ラグビー」

「好きだよ。でなきゃこんなに長くは続かない」

「もしかして、ラグビーやって超筋肉質になって、女の子にもてようとかそういう算段じゃないだろうな」

十分筋肉質な気がするけど。

「別にそんなんじゃないって。何となく、趣味だよ。好きだからやってるだけ。確かに勉強と両立させるのは辛いけど、楽しいから続けられる。それだけ」

ニルスは本当に楽しそうに笑いながら答えた。こいつ、レックスと同じような事言ってる、と心の中でばやきながら、へえ、と曖昧に返事をした。既にニルスの脇には十枚近い皿が積みあがっている。店の中ではジャズっぽいピアノソロ曲が流れていて、寿司屋にはあまり合っていない。

「アランは、好きな事とか、ないのか？」

唐突に訊ねられた難しい質問に、僕は飲みかけたお茶をテーブルに戻し、目の前を同じ速さで流れていく寿司をじっと見つめた。何秒も時間を置いてから、どうだろうな、と言った。

「どうだろうな、って」

「だって、いまいち分かんないんだってば。俺とお前は、今こうして英語で喋ってる、それしか取り得がないし英語だけがたった一つの得意科目だ。だけど、その語学力を生かして将来の仕事にしようなんて考えた事はない。これといった趣味も無いし、好きな事に一生懸命打ち込むような性格じゃない」

「英語を勉強してることに打ち込んでるじゃないか」

「違うよ、英語は洋画とか見てるうちに自然に慣れてきただけで、本気で勉強なんてしたことないってば。中学と高校の授業を普通に受けてきただけ」

愚痴をこぼすようにだらだらと言いつつ訳を並べると、ニルスが背もたれに深く身を預け、「単調だな」と呟いた。単調、と繰り返すと大きな溜息が返ってきた。ニルスの横顔はまるで告解室で懺悔する熱

心なキリスト教信者のように、全身から悲壮な気持ちがオーラになつて宙へ放出されていることが分かる。

「本当に心から熱中出来るものがなかったら、生きてる意味すら分からないままじゃないか」

その静かな言葉に、かもしれない、と虚ろに答えた。真剣に言葉を理解しようとする姿勢がない自分に気がつく。これ以上何かを語るのも億劫だった。片手を上げて、店員に精算を頼む。ニルスの食べた寿司の数が多すぎて、二人の総代金は四十ドルを越えていた。僕はニルスの後頭部をひっぱたき、けらけら笑う彼に伝票を突きつけて払わせた。

生き甲斐や罪悪感が人を生かしている。大抵の人間は持っているそんな単純なものすら無い僕は、どこに向かって歩いているのだろう。

アリシアに会いに行く、という言葉にニルスはひょこひょこついてきた。キャシードラルから西、エイボン川をまたぐ鉄製欄干のウースター橋を渡ってさらに歩いた先にアートセンターがある。そこまで寒い中行くというのに、パーカーを着た僕と違いニルスは長袖のＴシャツのみだ。さすがスポーツマンは元気だね、と悪態をつきながら笑い、二人で歩いていった。これから少しずつ暖くなり、暑くなり、クリスマスがやってくる。

ウースター橋を渡ってすぐのところ、地方自治体の会館の前に、ロバート・ファルコン・スコットという探検家の真つ白な像が立っている。一九一二年一月に初めて南極点に到着し、帰路で遭難死したらしい、五ドル札のエドモンド・ヒラリーに次ぐ有名人だ。

日本車が無数に行き交う交差点で、信号機にある歩行者用の大きなボタンを手の平で押す。それほど待たずに青に変わり、全然体躯の違う僕とニルスは並んで渡った。クライストチャーチの日曜日は人が多く、スケボーで滑っている少年や観光客やストリートミュージシャンで賑やかだ。中心街だというのに、日本と違って木々や公園

が多く、コンクリートの歩行者用道路を離れば芝で覆われた憩いの場がたくさんある。

ウースター橋を渡った時、ちょうどパントと呼ばれるボートが真下の川を悠々と進んでいた。「カサブランカ」のボギーのような帽子をかぶった男が先頭に立ち、何メートルもある棒で川底を突いて、夫婦の客を乗せた細長いパントを漕ぐ。川には無数の鴨の親子が群れをなし、手を伸ばす夫婦客から逃げるように泳いでいる。橋の上をのんびりと路上電車のトラムが通る。僕ら二人は橋からパントと鴨を眺めながら、クライストチャーチってこれしか目の付け所がないんじゃないか、と笑いあった。確かに、他は知らないが少なくとも日本人のツアリストたちは、観光ガイドブックの中にキャシードラルとこのパントとトラムの写真を見てニュージーランドに現物を見に来るのだらう。エトランゼたちが求めるより格調高くもなく、日本と違い美しい自然に溢れているニュージーランドの、全く典型的な風景だ。

「いつか、日本にも行きたいな。アランの家族にも会ってみたいし、神戸や広島を観光して回る。ニュージーランドと違って、小さい家がひしめきあってるんだらう?」

僕がずっとニルスに教えてきた日本の文化。写真などを何枚も見せてきたから、彼はいつも日本に行きたいとぼやいている。確かに、西洋人にとって日本は憧れだろうし、僕のような知り合いがいたらそれほど苦もなく来れるかもしれない。だけど、僕はまだ、日本に戻るかどうか決めていないのだ。すぐにニルスに返事は返せない。ウースター橋を渡って少し歩くと、アートセンターが右手に見える。キャシードラルのような古めかしい建物がいくつも並び、マーケットのカラフルなテントが無数にひしめきあっている。人の数も尋常じゃない。

僕らはすぐに敷地内に入ろうとせず、センター前の道路に出来た人だかりに目をやった。群集の中央で、スーツを着たストリートパフォーマンスが冗談を飛ばしながら得意の技を披露している。ここでは

ストリートパフォーマンスが大々的に行われることも珍しくない。

僕らはパフォーマーの真正面、センターの植え込みに座っている他の人たちに混じって、それらを見ていくことにした。

「いいですか、皆さん、よく見ていて下さいね」

二人いるパフォーマーのうち背の高い長髪の男が、二本の棒を両手に持って、飾りがついた長い棒をその間で何度も交差させ、空中に飛ばしたり、一本の棒の上で回したりする。僕もあれは趣味でやっている、デビルスティックだ。

「これから、外国のジャグリングをご紹介します。僕はスペイン語は話せませんが、スペイン風のジャグリングなら出来ますよ！」男が名前を呼ぶと、小柄な方の男が、先端に火をつけたファイヤージャグリングを手渡した。赤々と燃え盛る炎に怖気づくこともなく、男はそれらでプロペラやピルエットをする。危険な演出に観客は驚き、拍手を送った。どこがスペイン風なのやら、さっぱり分からないが、程よいウィットと演技に腹を抱えて笑った。日本風のジャグリングだと言い出して男が取り出したのは、刃渡りの長いすらりとした日本刀三本で、それで鮮やかにジャグリングをしてみせる。僕は真正面で苦笑しながら、別に日本刀じゃなくてもええやんけ、と日本語で呟いて眺めていた。

そうこうしているうちにもう一人の小柄な男が、キャリアケースの中から一輪車のタイヤを取り出した。続いていくつもいくつも出てくる長い棒のようなもの。すると、二人がかりでそれらを全で一輪車のタイヤに繋ぎ、道路に横たえ相当な長さになるまで繋いだら、最後にサドルとペダルを先端に接続した。高さ三メートルはあるのかという巨大な一輪車の出来上がりだ。

「さあ、みなさん、今から僕がこの一輪車に乗ってみせます。ですが、乗るためにどなたか助手が必要です。僕はこんなに足が長くないですからね！」

客の失笑を誘いつつ、二人のパフォーマーは群集から適当な人を選び、来るように促す。すると、小柄な方の男がニルスに声をかけて

きた。

「その体格のいいお兄さん、助手になりませんか？」

ニルスは一瞬僕の顔を見たが、「行きなよ」と促すと面白そうに五メートル一輪車に駆け寄った。嬉しそうな表情をしているニルスを見つめながら、さて何が起こるのかと植え込みに座ったまま片肘を立てた。

小柄な男は、集まった六人の男たちを並べ、名前や下ネタを言わせたり、謎のポーズをとらせたり、掛け声の練習をしたりして観客の爆笑を誘う。長身の方の男が横たえたままのサドルにまたがり、男六人はそれを掛け声と一緒に勢いよく持ち上げる。街灯よりも高い位置まで立った一輪車は、男達によって支えられ、ふらつきながらもどうにか垂直を保っている。そのパフォーマン스에僕は感嘆の声を漏らしながら拍手を送った。三メートル一輪車が町の中で目立つ通りすがりの人も足を止めて一輪車の上にいる男を見やる。拍手が止まない。

僕は汗を浮かせて一輪車を支えているニルスの姿を見守っていたが、突然誰かに背後からガバツと抱きつかれた。香水の匂いと背中当たる柔らかい胸の感触。僕は一瞬悲鳴をあげて身構えたが、相手が誰だかすぐに分かって肩越しに振り返る。美しい、でもなんだか幼さの残るブロンドの女性がいた。

「ハアイ、新夢。久しぶりじゃない。元気だった？」

いつもと変わらない無邪気な笑顔。「やあ、アリシア」と言いながら僕は彼女の頬に軽くキスを落とす。最初は恥ずかしくて実践出来なかったこの欧米風挨拶も、今は完全に僕の日常に溶け込んでいる。アリシアは長く美しい髪を肩の後ろに払いながら「ニルスは一緒にやないの」と言った。

「あそこにいるよ、ほら。一輪車を持つてる人たちの中」

僕の肩口から覗きこむように、パフォーマーたちのいる中央を見やる。アリシアは「なんだ、巻き込まれたんだ」と苦笑して僕の隣に座った。ふんわりと鼻をつく優しい香り。数ヶ月前、僕が彼女の誕

生日にプレゼントした日本ブランドの香水。甘いフルーツのような香りに僕はしばらく浸っていたが、すぐにニルスに視線を戻した。彼女にあまり目を向けすぎると、そのモデルのようなスタイルの腰に思わず手をやりそうで怖い。

「それではみなさん、僕が合図をしたら、一斉に手を放して一輪車から離れてください」

小柄な男がカウントをすると、六人の男達は一輪車の周りから散って群衆の中に逃げた。一輪車はそれでもまだ立っている。長髪の男がバランスを取り前後に動きながら、街灯の先端近くで手を広げて見せた。怒涛のような拍手が沸き起こる。僕の隣に座っているアリスアが「きゃーっすごーい」とはしゃぎながら子供みたいに足を踏み鳴らす。

一輪車をずっと支えていて汗まみれのニルスは、戻ってきてすぐにアリスアの存在に気がついた。

「ハロー、アリスア、元気そうだな」

「そっちこそ、ラグビーの練習頑張ってる？」

「そこそこだよ。新学期が始まったばかりだし、そんなに力入れてない」

二人もまた、僕と同じように頬にキスをし合う。別に僕達は恋人同士とかそういう関係じゃないけれど、この国では親しい男女間の挨拶としてはごく普通だ。ニルスはもといった場所に座り込み、一輪車を見守った。

パフォーマーの二人は、炎の燃え盛るスティックをジャグリングで地上と一輪車上交互に投げあったり、一輪車に乗ったままあちこちを走り回ったりして、見事なパフォーマンスを繰り広げた。とてもない高さの一輪車が喝采を浴びているが故に遠くの人からも目撃され、水のように見物客が増えていく。

最後に、長髪の男が一輪車からジャンプして飛び降り、二人揃って帽子を脱いだ。「Thank you so much!」とお辞儀をしたあと、手に乗るほどの袋を持って見物料を求める。この国

ではストリートパフォーマンスを生業としている人も少なくないのだ。散つてゆく人たちはみんなポケットから小銭やお札を出して、袋の中に入れてゆく。その見物人一人一人に対し、帽子を脱いで丁寧にお礼をするパフォーマンス二人。片方が十ドル札を袋から出して頭上で振り回し「これが見本ですよ！」と叫んで笑いを取る。僕も財布の中から五ドル札を出し、三回ほど手早く折って袋の中に入れてやった。ニルスとアリシアも同じようにお金を払っていた。

「随分とごぶさたね。ニルスはこの間イーストゲートで見かけたけど、新夢は何週間も会ってないわ。どうしたの？」

僕達は大勢の見物人が去っていった元の静かな道路の端に立って、久しぶりの再会を祝った。僕は、課題に追われて、と頬を掻きながら言い訳をした。その言葉にアリシアは少し笑い、勉強熱心なあなたらしい、と素直に感想を述べた。

「身体、壊さない程度に頑張りなさいよ」

「分かっているってば、いくら軟弱だからってそこまで日本人をなめてもらいたくないからね」キャスケットをかぶり直しながら答えた。「そうそう、新しい商品をたくさん作ったのよ。よかったら見ていない？ 男の子向けもあるから。サービスするわ」

僕達は促されるまま彼女のあとをついて行って、アートセンターの敷地内に入ってしまった。中世風の建物で出来たこのギャラリーには、多くの作品が展示されている他、観光客向けの土産屋やカフェもある。アートセンターの敷地はあまりにも広く、一つの学校の校庭より大きくて複雑だ。そのアートセンターより反対側、ひととき広い庭でマーケットが大々的に展開されている。フリーマーケットよりはかなりしつかりした、日本でいう夏祭りの出店のようなものだ。個人がそれぞれのスペースでビニルシートを敷いたりパラソルを立てたりして、手作りの品物やお土産を広げて売る。レックスが営業しているような車の屋台もたくさん並んでいる。混雑する時は買い物客でこった返す、クライストチャーチのもう一つの有名な建物だ。

アリシアは慣れた足取りでマーケット敷地内の人ごみを抜け、パラスルを立てた彼女の販売スペースに僕らを連れていった。パラスルの下には大きなテーブルがあり、その上には彼女お手製のかわいらしいアクセサリーがたくさん並んでいる。それぞれケースやプレートに置いてあり、値段がつけられている。テーブルの正面に貼ってある画用紙には大きく、「Discount 10\$ for over 30\$」と書いてあった。

アリシアは机の反対側に立ち、僕ら二人を前ににこやかに説明を始めた。

「そっちのウッドケースに入っているのが、男の子用のアクセサリーよ。綺麗な貝殻がたくさん見つかったから、それをレザーの紐でネックレスに改造したの。ガラスを細工したピアスもあるわよ」

彼女は昔からこういった細かい作業が得意らしく、自分でアクセサリーを作っては身に着けていた。買うよりずっと安い、という理由で、材料は直接リトルトン海岸から貝を拾ってきたり、すでに持っていた流行遅れのアクセサリーを分解したりとかなり凝っている。ピアスの穴をあけていない僕は、貝殻の虹色に輝く部分を切り取って作ったというペンダントを十二ドルで買った。ニルスはブレスレットやピアスなどをたくさん買い、四十五ドル分を安くしてもらって三十五ドルで買った。

「結構売れてそうだな、アリシアの手作りアクセサリー」

「どうかしら。冬に入る前は買う人もたくさんいてくれたけど、今はまだ寒いからあまり人が来なくなっちゃったわ」

「もうすぐ11月だし、桜も咲きつつある。少しずつ春らしく暖かくなってきたるじゃないか、大丈夫だよ。アリシアが売ってるもの、綺麗だからさ」

アリシアは頬を赤くして照れながら、そんなことないよ、と笑った。彼女が否定するようにぶんぶん振っている手に、小さな傷がたくさんついていた。

「それはどうしたの」

僕が手を指さすと、彼女は一瞬きよとんとその手を見たあと、ああ、と何事も無いように答えた。ぱつと広げて見せた指先の爪には薄いピンクのラメ入りマニキュアが塗ってあったが、ところどころ剥けて白く傷ついていた。

「アクセサリーを作ってる過程で、ペンチやキリで擦っちゃったんだよ。血が出るような怪我じゃないし、たいしたことないわ」

「気を付けろよ、女の子なんだから顔に怪我しないように」

ニルスが慌ててそう促すとアリシアは、平気よ、と自信たっぷりの笑顔で返した。彼女は椅子から立ち上がり、「ここで話しこむのも他に迷惑だからあっちに行こう」と僕らをアートセンターの奥へ誘った。建物の反対側には学校の校庭ほどもある広い中庭があり、そこへ行く途中の細い通路にも屋台が並んでいる。こちらはフィッシュ・アンド・チップスやホットドッグのような軽食ではなく、本格的な料理が紙皿で出てくる。僕らは途中それらの店で缶ビールを買い、鴨がたくさん歩き回る中庭のベンチに座った。

「よいしょつと」

アリシアは右足をかばうようにひきずりながら、ベンチにどうにか座った。その姿を見て、ニルスが缶をあけながら尋ねた。

「右足の調子は大丈夫か」

「何とかね。こないだ病院に行って、調整してもらったから」彼女も同じようにビールの缶のプルトップをあげて一口飲む。僕は心のどこかがひどく痛むような気がして、それを紛らわすようにビールを一気飲みした。喉へのその刺激に、僕は全神経を集中させた。

随分と長い間、話し込んでいた。会っていない間の事、寝込んでいた間にしていた事、日本の事など。僕らは取り留めも無い話を延々とするのが好きだ。話題は尽きないし、音楽の趣味や好きなラグビー選手なども共通している。だから、まるで何かから逃れるように、互いを責める事無く、つかみ所のない話を繰り返す。僕らには、そうするようにしか仕向けられていない。

僕はアリシアにまだ何も言えていない。この二年という歳月を、僕

がいかに苦しみ、罪をあがないながら生きてきたか、彼女はきつと知らない。この国で唯一、僕の本当の名前を呼ぶ事が出来る、彼女は。

唐突に、アリシアが思い当たったようにウエストポーチの中から、日本のパナソニック製のMP3を出して、僕に手渡した。

「新夢、もし新しいCDを持っていたら、ここに入れておいてくれない？」

「CDって、誰のがいい？」

「リユーイチ・サカモトが欲しいわ」

アリシアは笑って片手でピアノを弾くしぐさをして見せた。坂本教授の曲は海外でも人気が高い。ピアノをやっていた彼女は僕と同じく教授の熱烈なファンで、日本でしか手に入らないCDも持っている。僕は、分かった、と出来るだけ明るく返事をしてそのMP3をジーンズのポケットに入れた。丸みを帯びた本体の感触は、ポケット越しに僕を無言でなじっているような気がした。

「それじゃあ、またいつかね」

「うん。連絡するよ」

長話をしたあと、僕らはアリシアと別れ再びキャシードラル・スクエア前に戻ってきた。もうすぐ陽も落ちる時間帯だ。帰る途中で「ウエストフィールドのリカトンモールに寄っていこう」とニルスに言われ、コロンボストリートを下って二ブロック先のメトロバス発着所まで歩いていった。何となく、足取りが重かった。

「元気でやってるみたいだな、アリシア」

ニルスの呟きに、僕は曖昧に頷く事しか出来なかった。俯いて歩く僕を見かねたのか、ニルスは溜息をついて僕の頭をばし叩いた。うがつ、と蛙が踏まれたような声が出る。軽い力のつもりなのだろうが、ラガーマンの腕力は頭痛を誘う。

「大丈夫だって。彼女は彼女なりに頑張ってるじゃないか。お前は
お前の生き方をすればいい。それが彼女に対する一番の気遣いだ。
そつたる？ あんまり気に病むな」

もう何度も聞いた言葉だが、精一杯笑顔を作って、ちゃんとアリシアには言うつもりだから、と答えた。ニルスはまだ不安げだったが、何も言わずに停留所へと歩いていった。それが救いだった。

僕は彼の背を追って走る。スニーカーから伝わる地面の感触。この街に來ると決めてから憧れていたこの地面。しかし日々歩くようになってからは、初めて異国の地を踏んだ時の初々しさや感動など忘れてしまうものだ。

バス停に着いてすぐ、ニルスは大学の体育館の方へと走っていった。ラグビーの練習のためだ。僕は夕闇迫る空の下、濃い青緑色に染まっているグラウンドの芝の上を歩いていった。帰ったら晩御飯作らなきゃな、なんて考えながら。

彼女の手作りのペンダントにそつと手で触れた。鎖骨に冷たい感触を伝えるそのペンダントの表には、貝殻の裏側のきらきらした部分のはめ込まれてある。これを彼女は手を何度も傷つけながら、必死になって作っている。僕は胸が痛むのを感じた。

傷ついても、傷ついても、彼女はまだ頑張っている。自分の信念を信じ、好きな事を精一杯やっている。羨ましい裏、ガラスに少しずつヒビが入っているような違和感を禁じえなかった。

僕はグラウンドを俯きながら歩いていた。すると川から出たらしい鴨の親子が、昼間のように列を作りながらグラウンドを横切っていた。僕は足を止めて彼らをじつと見つめた。母親鴨が十羽近くの子供達を連れて、芝の上を鳴きながら歩いている。子供達は毛がふんわりしていて、かわいらしい。きつとまだちゃんと泳げないだろう。僕はしゃがんで、一番後ろにいた赤ちゃん鴨の背中を指先で撫でた。手の平に四羽は乗りそうな小さな鴨だ。ふわふわで柔らかい身体をしている。甲高い声でかわいらしく鳴く小鴨の背中を、指の腹ですつと撫でていた。

すると先頭にいた母親鴨が、我が子の危険を察し、その大きな翼を

広げて飛び掛ってきた。僕は慌てて立ち上がり列から飛びのいた。鴨は再び何もなかったかのように、小さい声で鳴きながらその場を去っていく。僕は呆然と立ちすくんだ。

少しずつ暗くなっていく大学のグラウンドで、僕は暫く立ち止まっていた。寮の部屋やキャンパスの明かりが灯り、黄色い光がいくつも見え始める頃、いくつものわだかまりを喉の奥に詰まらせたまま踵を返して寮へ戻った。

3 事故

アリシアの右足は不慮の事故によるものだ。彼女の右足は太ももから下が無く、義足で出来ている。車椅子で生活していたのを見かねた彼女の父親が買ってやったものらしい。厳しい練習の末、初めて義足で歩けた時の、彼女の嬉しそうな表情を忘れた事はない。

僕とアリシアの初めての出会いは、大騒ぎする人ごみと野次馬の中での事だった。

あの二年前の秋、まだこっちに來たばかりの頃、僕が乗っていたメトロバスが接触事故を起こし相手の乗用車は大破した。その車の助手席に座っていたのがアリシアだ。避難するためバスから外へ出た僕が見たのは、民家のレンガ塀に突っ込んでめちやくちやに潰れた黒のミツビシと、助手席の割れた窓から覗く白い腕とブロンドヘアだった。ほとんどぺしゃんこになったボンネットに押し潰されていた前列席。

僕は何も考えず駆け出し、割れた窓から手を突っ込んで助手席の口ツクを外し彼女の上半身を引きずり出した。彼女との最初の出会いは血まみれだった。思わず、「ひっ」と声が出た。画面の向こう側だからと安心して見ていられるアクション映画の事故シーンが、如実に具現化されていた。ガソリンの臭いがこれは現実なのだと自覚させる。彼女の身体はぐったりしていて、意識がなかった。エア・バッグが胴体への衝撃を多少緩和させていたものの、割れたフロントガラスの破片などで身体中が傷つき、潰れたダッシュボードに両足が挟まって抜け出せなかった。運転席は複雑にひしゃげた車体やエア・バッグで、僕からは見えなかった。

僕は反射的にアリシアの手首を握った。脈がある。パニックになりかけたが、なんとか判断は冷静だった。無理に引っ張ると彼女の身体を傷つけるだろう。しかし僕はこの車を持ち上げるにはあまりにも貧弱すぎた。

「誰か手伝って下さい！ まだ彼女は生きています！」

振り向きざま叫んだ。僕の慣れない英語にこたえ、野次馬から腕つぶしの強そうな男の人が何人か助けに来てくれた。僕らはボンネットを押し上げて彼女を引き摺り出したが、引つ張ったせいか車体の圧迫か、彼女の右足は既に膝と足首が有り得ない方向へ曲がつて潰れていた。同じ頃、車の反対側でも他の住民たちが運転手を引つ張り出していた。

数分後、駆けつけた救急車で彼女と運転手は病院へ運ばれた。サイレンを鳴らしながら走り去っていく救急車の背後を、僕は息を切らしながら呆然と見送っていた。警察が周囲を取り囲み現場検証を行っている時、何度か地元のテレビ局のリポーターに捕まりかけたが、すべて断り逃げた。警察との問答以外には一切応じなかった。その日は夜が更けるまで部屋で何もせず、ベッドにうつ伏せになって、ジャズを聴きながらぼんやりとしていた。

人助けへの純粋な善意のはずだったが、後になって僕は、血まみれの死体が出てくることに恐れおののいて他の乗客たちと一緒に逃げていた方が良かったかも知れない、とも思った。非情だと罵られても、他人を見捨てることなどよくある世の中だが、それでも僕がそう思ったことは「非情な奴だ」と言われてしまうようなことなのだろう。例えば僕を非難する奴らが彼女を助けるような行動に出るかどうかが未知数だとしても。

しばらく経ち、アリシアの家族から手紙が届いた。便箋には、運転席にいたアリシアの母親は内臓破裂の末に死んだ事、僕が助け出した彼女は奇跡的にも一命を取り止めたが、右足は再起不能の複雑骨折で切断したという事が書かれてあった。神経までやられたり悪性の腫瘍が見つかったりして、体の一部を切る事があるのは知っていた。

高校を卒業したばかりの世間知らずだった僕は、ニュージーランド上陸早々いきなり遭遇したドラマのような展開になかば焦っていた。当時からニルスとは付き合いがあったが、彼が新聞を読んで「これ

つてすぐその道路じゃん、すげえ有様だなあ」と呟いている脇で黙っているだけだった。ニルスにすがりついてカミングアウトしたのは手紙が来てすぐの頃だった。

数日後、決心を固め、僕は手紙に書いてあったクライストチャーチ病院へ見舞いに行った。病室でアリシアはベッドから身を起こしていて、僕の姿を見るなり目を見開いた。

「あなたが私を助けてくれた人なのね。本当にありがとう、心から感謝しているわ。どうお礼をすればいいのか。あなたは命の恩人だわ」

既に警察から話を聞いているのか、病室で軽く会釈しただけで彼女は僕を見破った。自分を車から救い出した日本人青年。まだろくに英語が分からなかった僕は、彼女の感謝の言葉をひたすら拾う事にしか神経を注がなかった。

母親を亡くしたというのに満面の笑顔。部屋に入った時の彼女は目の下に濃い隈が出来ていて、頬の涙の跡が痛々しく、食事も喉を通らないのかひどくやつれていた。髪など手入れが入っていないくさばさばだったので、後できちんと身なりを整えたアリシアに会ったときは正直驚いた。部屋に入った直後の彼女の表情は、まるで全てのものに諦念を覚えた老人のように無気力で、無感情だった。だからこそ、僕の前では必死で笑おうとしている彼女の姿が痛ましかった。

辛い状況こそ笑った方がいい、という話を僕は軽蔑している。だから彼女の行動を理解できなかったし、見ていて辛かった。

「自己紹介をしていなかったよね。私は、アリシア・コーゼル」

「えっと、僕は、アラム・スギヤマ」

「アラム？ 随分変わった名前ね。日本人だって聞いているわ」

彼女は僕の名前を正確に発音した。欧米人には言いづらいこの僕の名前を、みんなが「アラン」「アレン」などと簡単に発音するのに対し、彼女だけはあっさりと言つてのけた。おそらく以前に日本語をかじっていたか、もしくはよっぽど滑舌がいいのだろう。ニュー

ジーランドの先住民であるマオリ族の言葉は、発音が日本語とほぼ同じであることを思い出した。今思えば、彼女は学校の授業でマオリ語を習ったことがあるのかも知れない。

僕らは小一時間ほど話した。運転していた母親が亡くなったと言うのに無邪気に話をするアリシアを、僕は見つめて頷くことしか出来なかった。会話が半分以上聞き取れなかったのもそうだが、その頃から既に彼女への罪悪感を抱えていたからだ。御転婆娘と言えそうな彼女の無垢さが、逆に僕の身体へ無数の切り傷を作っていた。少なからずストレスと絶望を感じているだろうに、彼女の肌は純真で透き通っていて、媚びる事無く、穢れを知らぬ無垢さを放っていて、美しかった。

後から花束を抱えて部屋に入ってきたのが、キャシードラル・スクエアでホットドッグを売っているレックス・コーゼル、彼女の叔父だった。レックスと出会ったのもそれが最初だった。

結局、看護師が検査に来るまで僕はアリシアの話を聞いていた。自分の身の上や、好きな歌手、得意料理の事などをどんどん話してくれた。少女のように細くて白い彼女の足は既に右足だけ無く、毛布の右足の部分はぺたりと頼りなく平たくなっていた。彼女は命の代わりに、自分の右足を悪魔に売ったのだ。彼女は僕に足の事を指摘して欲しいという素振りは見せなかったから、僕も何も言わなかった。足のことも、母親のことも。

今の彼女は義足を付けていて、以前のような車椅子の姿は見受けられない。普通に歩いていれば本物の足と何ら変わらない。しかし、それが余計に僕の神経を蝕んだ。

義足で大学を卒業した彼女は就職先を探していたがまだリハビリ段階で、不自由な右足のせいで多くの雇用先から拒否され、キャビンアテンダントになりたいという彼女の夢もバビロンの塔のごとく崩れ去った。現在に至るまでバイト程度の仕事を何度も点々としてきた。もちろん立ち仕事など出来ない。アートセンターでアクセサリを売っているのも、生活のためだ。僕らが想像するよりずっとア

リシアは苦勞しているはずなのに、彼女はいつも元氣で、大丈夫大丈夫、と言って常にポジティブシンキングで歩き続けている。仕事も諦めず探し続けているし、絶望した様子も見られない。彼女は彼女なりに、未来に期待を寄せているのだ。

だけど、五体満足の僕は卒業後の進路について全く興味がなく、日々を何となくぼんやりと過ごしている。いくらだつて道はあるし、選べないことなどないのに、将来の夢もやりたい仕事もなく、ニユージーランドに残るか日本に帰るか、そんな単純な事で延々と悩む優柔不断。抱えるほどの夢があるのに実現できない彼女の脇で、そんな事をしている僕。痛いほど苦しいはずなのにいつも笑顔を絶やさないアリシアを見ると、罪悪感で潰れそうになる。

アリシアは事故後も、現在のようにアクセサリーを売って元氣に過ごしている。だけど僕はこの二年間、一度たりとも、自分の罪の意識を彼女に打ち明けた事が無い。僕自身が何か暗く重たい闇にずっと追われている気がして、彼女に断罪してもらうまでそれは晴れないような予感がする、それだけのために僕は一步を踏み出せずにいた。

朝は異常なほど暖かった。普通、十一月はまだ冬の名残が残っていて、春先と冬の終わりのちょうど中間だ。さすがにここまで暖かくはない。冷え込む朝のはずなのに、肌はじんわりと汗ばんでいた。あまりの暑さに、僕は夜中にベッドの毛布から毛虫の如く這い出して、着ていた服を無意識に脱いで下着一枚になり、肢体を放り出して再び眠った。そんな格好で寝ていて、朝、ニルスのノックに夢うつつにしか返事が出来なかった。彼がドアを開けて僕の姿を見るなり、

「おっと、一人エッチ中に失礼」

とからかって退散しようとしたので一気に眠気が吹き飛び、「違う違う！」と駆け出して彼の首根っこを掴んで必死に否定したのだった。今日の目覚めは、服の背に氷を突っ込まれた時より破壊力があった。

「いくら暑いからって、パンツ一丁で寝るなよ、男女混同の寮で」大学のカフェテリアで朝食を食べながら、いつもの大量メニューを並べて高笑いするニルス。かじったベーコンが不味い。別に意識的にああいう体裁になったわけではなく、暑いと感じた身体が本能によってもぞもぞと服を脱ぎただけだ、と若干屁理屈的に言い訳したかったが、屈辱と暑さに脱力しきってそんな元気も出ない。僕は溜息をついて肩を落とし、だってあんなに暖かいなんて思わなかったから、と言った。

「確かに今日は暑いな。地球温暖化万歳だ。これからどんどん春になっていくから、薄手の服を出しても早くはない」

「とか言って、また寒くなったりして」

軽く失笑しながら、僕はやはり先に朝食を食べ終わった。まだ半分以上も皿に残っているニルスを待って、机に頬杖をついた。この量を一日三食平らげるのだから、こいつの胃袋を一度取り出して容積を調べてみたい、と思った事は何度もある。

「今日から授業に復帰するんだろう？」

ニルスの嬉しそうな言葉に僕は「おう」と答えて頷いた。いつまでも休んでいては追いつけなくなる。英語の課題も溜まっているし、単位も危なくなる。遅れている分を取り戻すため、これから色んな先生の元を回らないといけない事を考えると、背筋に寒気が走った。僕は朝食を食べ終わってすぐカフェテリアを出て、寮までの構内の道を延々喋りながら歩いていった。芝生が敷地のほとんどを埋め尽くすクライストチャーチ教育大学。朝もやが晴れてきて、通学の車が駐車場に並び始める。僕とニルスは廊下で別れ、それぞれの部屋に入ってしまった。僕はパソコンを立ち上げ、昨日アリスから預かったMP3プレイヤーをUSBで接続した。坂本龍一のCDを挿

入し、曲をMP3に移す。僕は荷物を準備し、寮を出た。授業が始まる前に、大学の図書館に行くつもりだった。

自分のiPodを首からさげてレッド・ツェッペリンを聴きながら、もと来た道を戻ってカフェテリアの前を通り過ぎる。校舎の間にある小さな連絡通路を横切り中庭を斜めに突っ切っていけば、ここら最大の蔵書数を誇る図書館がある。

この大学にはいつの間にもやら一匹の黒猫が住み着いていて、学生からはジャックの愛称で可愛がられている。中庭や寮の構内でのんびり日向ぼっこをしては、いつも学生に構ってもらうのを待っている。まだ人も少ない時間帯、ジャックも居ないだろうと思っていたら、図書館の前にある大きなベンチの下で丸くなっていた。僕は彼の前にしゃがみ、手を差し出した。彼は僕の手になめらかな頭を擦りつけ、喉を鳴らす。実にのんびりとした猫だ、僕によく似ている。しばらくくぐろごろと僕にじやれついていたが、何も食べ物をよこさない事が分かると、ジャックは暖かい日差しの下へ歩いていった。ゆっくりとした足取りで決して急ぐ事無く、僕の目の前から去っていく。本当に似てるな、と僕は呆氣に取られて肩を落とした。

図書館の中は程よく空調が効いていて、まだそれほど混雑していない。僕は迷わず階段で二階へ上がり、小説のコーナーへ行った。ここに来たばかりの頃は、暇があればニュージーランドの歴史や民俗学や文化についての本にかぶりついていたのだが、もう読むものが無いんじゃないかと思うほど読んだ。最近では、日本でまだ翻訳されていない本を先取って読んだりするのが好きだ。

僕は好きな作家の本を探しながら、アリスシアのことを考えた。彼女は今、長いリハビリを経て普通の人間と大差ないほどすっかりとした足取りで歩いているが、仕事はまだ見つかっていない。大学を卒業して数ヶ月、ずっと就職先を探しているらしいが、彼女の体調と動きのぎこちなさ、長時間立ってられない義足、走りづらさが災いして、いつもギリギリのところまで不採用になる。結局のところ、事故後に親元を離れて一人暮らしをしており、生活費はあのアート

センターで手製アクセサリーを売って稼いでいるらしい。それでも足りないのでバイトを掛け持ちしている。

そんな辛い状況にも関わらず、彼女は必死になっている。その懸命な姿は僕も尊敬しているし、憧れている。だからこそ、五体満足の僕がしっかりしなきゃいけないのだと思いつつ、僕は何一つとして将来の目処がたっていない。むしろ、身障者のアリシアの方が張り切っていて、いくらでも進路を持つ僕の方がだらけているようじゃ、僕が石を投げられるのは当然かもしれない。

彼女が足を引き摺るたびに思う。僕は彼女の夢を奪ったのだ、と。道を何本も塞いで、それでいて僕は目標も何もなく、ただ赴くままに日々を過ごしているだけ。

僕は何をしてあげられるだろう。進む事も、引き下がる事も許されない彼女に。贅沢に自殺する事も、思い通りの人生を歩む事もできない、アリシアに。

……いや、この「何をしてあげられるか」という感情すら、罪悪感を拭うためのエゴに過ぎない。

本を選ぶ手を止めた。背表紙にかけようとした指を引っ込め、その手を強く握った。そして、ポケットの中に入れている財布から、一枚の写真を出した。一年程前、まだ車椅子だったアリシアとニルスと僕で、リトルトンに行った時のものだ。ロープウエーに乗って休火山の上から港を臨み、浜辺の大きな岩穴を探検した。車椅子に乗っているアリシアを正面に、僕とニルスが後ろに立ってハンドルを持ち、写っている写真。三人とも、屈託の無い笑顔で。

エゴでも構わない。僕は最高の親友である彼女の笑顔を守りたいんだ。

僕はその写真を暫く眺め、図書館を出て行った。自動ドアを出てすぐ左側にある校舎に入り、エレベーターで四階に上がる。新聞記事や行事の案内が壁中に貼られた南側通路を渡って教室に入ると、中にいた他の友人たちが突然「おかえり（ウェルカム・バック）！」と大声で騒いで怒涛の拍手で迎えてきた。僕がいつも座っている席

には何故かヴェースに入った花が置いてあつて、まるで死んだようなジョークに、肩をすくめて笑った。

4 有言不実行

キャシードラルの聖堂内に入るのは何日ぶりだろう。扉の向こうで僕を待ち構えていたのは、黄金の光と神々の像と、聖歌隊の美しい歌声だった。クライストチャーチ最大の名所であるキャシードラルは一般人にも広く開放しているが、それにしてもこのあまりの神々しさにおののく観光客は一体何人いるのだろうか。

キャシードラルは外観も美しいが、中に入るとそこは聖域、僕達が知らない世界に踏み込める。透き通る聖歌隊の声は、僕の心を静めてくれる。どんなに辛い状況に立たされても、どうにか乗り越えていける、と自信を持てる。だから、二年間もの海外生活を続けてこれたのだ。

あと一年。それで僕は、また分かれ道に立つ。ニュージーランドで就職か、日本に帰るか。普通に考えれば、海外の大学の卒業歴を持つていればそれだけで日本での就職が少々なりとも楽になる。だが、友達も多く馴染んでしまったこのニュージーランドを三年足らずで離れないでとどまっていたいという気持ちにも駆られ、やはり迷っている。卒試に失敗さえしなければ道はある。だが、もともと面倒臭がりで足元に火がつかなければ動じない性格が災いして、多すぎる道が迷いを生む。

僕は聖歌隊の声をもっと近くで聴こうと、無数に並ぶ長い椅子の間を歩いていき、手近な席に座った。装飾が輝き、蝋燭が何本も美しい火を灯し、それに金色に浮かび上がる神々の像は、怖気づきなくなるほどのオーラを放っている。真剣な眼差しで正面のキリスト像を見据えれば、全てが僕の目に見える世界しか存在しないような錯覚に駆られる。今こうして足を組んで座っているだけで、深い瞑想の世界に浸っているような、神秘的で虚無的な、不思議な感覚に駆られる。観光地というだけでなく、僕にとってこのキャシードラルは大きな意味を持っていた。目の前で揺らぐ蝋燭の火が、僕の瞳の

中で心を焼こうと構えている。金色の光は、僕の瞳孔を通じて体内に入り、僕自身を優しく包み込む。この聖堂内の光は、僕の全てを鋭く捉えて離さない。いつの時も僕を魅了してやまない。優しさや憂いは何一つない、ただ僕の心に警告し、剣の切っ先を向けるためのこの光。

僕は何をしているのだろう（ホワット・ハヴ・アイ・ビーン・ドゥーイング）？ それは、もう何度も繰り返された質問。

問い掛けては、曖昧な答えすらも何一つ出せずに消化不良で終わらせてしまう、永遠のアポリア。生と死、現在と未来と過去、強烈なリアルと鮮明なデイルーション、僕の全てに対して投げかける質問。答えを知ってもきつとこれからも反芻されるだろう質問。

僕は何をしているのだろう（ホワット・ハヴ・アイ・ビーン・ドゥーイング）？ 僕は何をしているのだろう（ホワット・ハヴ・アイ・ビーン・ドゥーイング）？ 壊れたお喋り人形のようにリピートされる。僕の周りにいる人たちに引け目を感じ、常に劣等感に苛まれてきた。透明なこの命は、流れ流れて、どこに辿り着くというのだろう。

絶望とは、愚者の結論である。デイズレーリがそんな名言を残していたような気がする。そうだ、きっと僕にとって絶望とは、何もしないまま縋りついている自分の屁理屈に過ぎない。海外の大学を受験したのも成り行きで、将来の目処が何一つない。そして、目の前の道を踏み固めようという意志も無い僕がきつと、最後に辿り着く結論として絶望を選ぶのだろう。神は人を許せど、誰も救わないというのに。

膝の上で固く拳を握る。聖堂内に満ちてゆく、黒く粘り気のある想い。僕は聖歌隊の邪魔をしないように静かに席を立って、アリシアのところへ行くことを決めた。アートセンターで相変わらず手作りアクセサリーを売っているか、この外のキャシードラル・スクエアで叔父のレックスと遊んでいるはずだ。

聖堂をあとにする僕を照らす金色の光は、いつもさほど強くない。

僕は振り返って神に臨んではいけない。

重い音を響かせるドアから外へ出ていくと、薄暗い光に目が慣れていたせいで、太陽の光がことさら眩しく見える。オゾン層がほとんどないこの国では、紫外線など年中ダイレクトに地上に降り注いでいる。僕はキャスケットを深くかぶり直し、スクエアへと続く浅い階段を、頼りない足取りで下りていった。遠く離れていく聖歌隊の声の気配が名残惜しかった。

キャシードラル・スクエア広場内にあるレックスのホットドッグ屋に、アリシアはいた。車の販売口の傍に立って、レックスと何かを話している。僕の存在に気付くと、アリシアはこちらに向かって腕が折れんばかりに激しく手を振った。いつでも彼女は元気いっぱいだ。

「新夢、どうしたの？ 水曜日なんかシテイに来ちゃって。授業は？」

まるで僕が講義をさぼってきたような口調に、歩きながら、終わってすぐに来たよ、と答えた。僕はおやつ代わりにレックスにホットチップスを注文した。元気そうに見える彼の額は既に、今日の異常な気温で汗だくだった。ほとんどノーメイクだから汚くは見えない。僕はいつもの調子ではしゃぐアリシアの、光が乱反射しそうな笑顔をぼんやりと見ていた。義足を引き摺っているようには見えないその明るさ。

「坂本龍一、転送したよ」

僕はポケットから彼女のMP3を出して手渡した。ありがとう、と言いながらそれを首に下げる仕草が美しかった。

「リユーイチ・サカモトのピアノは本当に素晴らしいわ。感情がこもっていて、情熱が感じられる。歌がない分、聴いてて落ち着くしね。でしょ？ 叔父さん」

ホットチップスを袋に入れていたレックスは「俺もファンだからな」と胸を張って言った。こうは言っているが、二人とも日本のミュージシャンは坂本龍一しか知らないらしい。僕はレックスからホット

チップスを受け取り代金を払って、自分の売り場に戻ろうとするアリシアについていった。

平日の昼間には、キャシードラル・スクエアにもアートセンターと同じようなマーケットが立ち並び、各々がパラソルを立てたり机を並べたりして商品を売る。日本では絶対見られない、交友的な国らしい光景だ。

アリシアはアートセンターと同じように、青のパラソルとテーブルでアクセサリーを売っていた。ここはアートセンターほど多くの店がひしめき合う場所ではないが、十件近くの店がテーブルに商品を広げている。

僕はアリシアの隣で、ジャグリングボールやクラッカーなど、パティや曲芸に関するものを売っている店のおじさんに声をかけた。何度もここに来ているから仲がいい。おじさんに頼んで、練習用に置いてあるデヴィルスティックを貸してもらった。二年前に初めてスクエアに来た時、珍しいと思って二十五ドルで同じ物を買ったことがある。

先が細かく分かれた布の飾りがついているカラフルなセンタースティックを地面に置いてキックアップでスタート、何度かのアイドリングのあとダブルスティッキング、腕慣らしに連続フルフリップを繰り返す。フライング、ピルエットで身体を一回転させて右スティックでキャッチ。またダブルスティッキングを続ける。アリシアは僕がこれをしているのを見るのが好きらしく、スクエアで店番をしていて客足が少ない時は、隣でスティックジャグリングをする僕をじっと見ている。

「どうしてそんなに上手に出来るのかしら。私は何度やっても、すぐにスティックを落とすの。誰か科学的に証明してくれないかな、スティックが空中に飛ぶ原理を」

「こんなもの、タイミングさえ揃えれば楽勝だよ」僕はテーブルの上に置いてあるホットチップスを食べながら言った。「俺だって、最初はそこのおじさんに教えてもらうまで全然出来なかったんだか

ら。上手い人はもっと上手いよ。上を望んだらキリがないけど」

「私には難しいわ。足を曲げてタイミングを取るのが上手に出来ないもの」

彼女も、僕の手の間から割り込むように、袋の中のホットチップスを摘まんで口に放り投げる。確かに、義足ではやりづらいかも知れない。でも慣れれば、僕のように足を曲げなくても立っているだけで出来るようになる。それを教えると、アリシアは嬉しそうにこっと笑って何も言わなかった。

センタースティックを何度もくるくるプロペラ回しをさせながら、彼女の視線を避けるように後ろを向いた。僕だったらきつと、知り合いの誰かが僕の出来ない事を軽々とやってのけたら、自己嫌悪に陥って抜け出せなくなるだろうに。

僕が過剰に危惧しすぎなのか？ ただの杞憂か？ 冷静に考えてみるが、打開は見つからない。

何度も繰り返される質問。僕は何をしているのだろう（ホワット・ハヴ・アイ・ビーン・ドゥーイング）？

時々ホットチップスを摘みながらスティックで遊んでいると、アリシアの作ったアクセサリーを興味深そうに見る、僕と同じアジア人の観光客が二人やってきた。新婚旅行らしい若い男女だった。女はアリシアのアクセサリーを手に取ったりして眺め、男は僕が黙々と繰り返すデヴィルスティックを珍しそうに見ている。同じアジア・モンゴロイドの人種だからか、言葉が通じるかどうか僕に尋ねてみたくて仕方がないようだった。

「三十ドル以上買えば、十ドル分を値引きしますよ」

選り好みしているらしい女に、アリシアは分かりやすい簡単な英語で説明する。女は何度も財布を開きながら、男と相談していた。その会話がハングルだったので、韓国人か、と僕は心の中で確信しつつプロペラを続け、あまり得意じゃないアンダー・ザ・レッグを一回やってみた。見事に落とす。

悩んだ末に女は二十ドル分ほどのアクセサリーを買って、「サンコ

「と訳の分からない言葉を言っ二人で去っていった。

「あの人、何て言ったのかしら」

「多分、Thank youって言ってるつもりだったんだよ。二人の会話を聞いてた限り、コリアンっぽかったし」

アリシアはくすつと笑って、面白いね、と言った。僕も同じように笑ってスティックを回しながら、こんな時間が永遠に続けばいいな、と思った。今なら地球が滅亡してもさほど神を恨まない。

この日の売り上げは六十ドルを越えていた。やっぱりキャッシュドラ
ル・スクエアはいいわあ、とご満悦のアリシアは、夕暮れ迫る中お
札をテーブルに積み上げた。五ドル札が圧倒的に多く、物凄い高さ
になっている。僕はアクセサリーを片付けるのを手伝いながら、ず
っとこっちで売ればいいのに、と提案した。

「だって、こっちはみんなスペースを取りたがってるもん。アート
センターは敷地が広いから簡単に店を開けるけど」

理屈は分かる。しかし、アリシアにとってこの小さな店は重要な収
入源なのだ。父親からの送金や死んだ母親の遺産もあるとはいえ、
足りない。もっと大きな観光地で店開きが出来ればいいのだが、そ
う簡単にはいかないのだ。

僕は大きなパラソルを閉じながら、彼女の右足に目をやった。ジ
ーンズを穿いていて、ぱつと見ただけでは義足だなんて分からない。
しかし、そのすらりと細い太股から下は金具で覆われている。初め
て僕に義足を見せてくれた時、「これが私の道を踏み固めるものな
のよ」と悲しげな瞳で言っていたのを覚えている。

彼女の義足を見るたび、僕の脳裏に事故当時の彼女の右足が思い浮
かぶ。車体に押し潰されて、変形した鉄パイプのようになっていた。
色んな方向へ曲がっていた関節、潰れた筋肉、血まみれの姿が、楔
のように僕の記憶に貼りついている。

全ての片付けが終わり、アリシアはグロスター・ストリートに面し
ている駐車場から車を持ってきて、畳んだテーブルやパラソルや残

った商品を後部座席に積み込んだ。店がなくなったスクエアは、どこことなく閑散としていた。

「手伝ってくれてありがとうね」

レックスがしたように、彼女は背伸びして僕の頭をキャスケットの上からよしよしと撫でる。いくら僕の方が年下とはいえ、ここまで子ども扱いはされたくない。よしってくれよ、と手を遮ると、彼女は面白そうに笑った。いつ見ても、彼女の笑顔は眩しい。

「新夢、今週の日曜日、あいているかしら」

運転席のドアを開けながら訊ねるアリシアの言葉に、僕は素早くスゲジュールを思い出した。大量の課題が出なければ時間はたっぷりある。とりあえずは暇だという事を伝えようと、彼女は嬉しそうに笑った。

「私の家に、ディナーにいらっしやいな。ニルスも誘って。私がお料理が得意なの、知ってるでしょ。久しぶりにご馳走を作るわ」

「分かった、必ず行くよ」

微笑んで運転席の窓ガラス越しに手を振ると、彼女の車は颯爽と東へ走り去っていった。彼女の自宅はウルストンの、一階建てが多いニュージーランドで全く典型的な、庭の小さな家だった。僕は彼女の家への道のりを思い出しながら、メトロバスの発着所まで歩いていった。

もう一度キャッシュードラルの中に行こうかと思ったが、今はその必要は無かった。

夕刻、寮に戻ってすぐ、ニルスに日曜の予定を伝えた。

「構わないけど、俺、その日は途中で帰らないといけない」

「そうなの？」

「夜に少しだけラグビーの練習をしようと思ってる。大会も近いしな、自主連だよ」

「オーケー、あとでアリシアに電話で伝えておくよ」

悪いな、と謝るニルスに僕は首を振った。彼の部屋を出て自分の部屋に戻り、携帯電話を取ったところで、ふと手を止めた。こっちで買った携帯電話を片手に立ちすくみ、それを再び机の上に置いた。そして、引き出しの中から新品の国際電話用テレフォン・カードを出し、十セントのコインで銀色のスクラッチを削った。電話をかけるための暗証番号が出てくる。

僕は部屋を出て寮のメインドミトリイに向かい、建物に入ってすぐの玄関に設置されている公衆電話に向かった。カードに書かれているナンバーを押し、訛りのない標準英語の音声アナウンスの指示通りに暗証番号と日本の国番号、実家の電話番号をプッシュする。料金残高を告げられた直後に、電話のコール音が鳴った。相手はすぐに出た。

「はい、杉山です」

「あ、お母さん、俺や」

随分久しぶりに喋る日本語だった。電話の向こうの母は突拍子もない声を上げて驚き、新夢やんね、と息子の連絡を喜んでいだ。祖国の実家の暖かさを思い出させる声だった。

「もう、何ヶ月も電話して来んから、何かあったんかと思ったわ」「別に大した事ないで。夏休み挟んどったから、課題に追われとっただけやって。上手くいけば今年でこの大学を卒業できる」

「そう、良かったわあ。元気にしてるん？ 御飯はちゃんと食べる？」

「相変わらず心配性やな、お母さんは」

彼女の苦笑が、通話口に吐息がかかった砂嵐のような雑音で分かる。「だって母親やもん、海外暮らしの息子を心配するのは当然やろ」と声高らかに主張する。還暦も近い母は六十年安保の共闘世代で、当時のデモ隊の学生とほぼ同い年の僕を、無茶ばかりする年頃、と勝手に決め付けては何かと心配する。

「こっちで犯罪でも起こさん限り、お母さんに連絡が行かへんのは当然なんやから、数ヶ月電話よこさんぐらいで焦んなや」

「そう言われてもなあ、親心っていうのんがあるんよ。あんたも父親になつたら分かるわ」

俺まだ彼女すらおらんのに、と答えたら電話の向こうで馬鹿笑いをされた。突っ込むポイントがずれていたかも知れない。頬を掻きながら参ったなあ、と苦笑する。

「それで、久しぶりに電話をして、用件は何あの」

「うん、別に大した事ちゃうんやけどさ」

理解不能なアジアの言語で電話をする僕を見て、驚きながらも笑顔で手を振って傍を通り過ぎる友達に、同じように手を振って笑い返した。受話器を持つ手を替えて、不安げに話した。

「俺、卒業後の進路でちよつと迷つとるんやけど、お母さんは俺に戻ってきて欲しいって思つとる？」

意外そうな声をして、母はしばらく考え込んだ。難解な質問だったかも知れない。かなりの時間が経って、焦っている僕の耳に届いたのは、頼りない溜息だった。

「そりや、親としては会いたいわ。もう二年も姿を見せんのやから卒業したら一回ぐらい戻ってきてても構わんて思つとる。やけど、そこから先はあんたが決める事や。一旦戻ってきて、そのまま日本におるか、またそっちに住むか。私に聞いたってしゃあないやん」

「それは分かつとる、承知の上で聞いた。でも俺としてはどっちでもええんよ」

僕は嘘をついた。本当は、どっちも選びたい優柔不断の欲張りだ。

「やから、自分はどっちに住もうと構わんから、俺を必要としてくれとる他者の意見で決めよう思つて」

「他の人の意見を聞いたとこでどないすんの。考えてみい。そっちにおる友達みんな、あんたと一緒におりたがつとるはずや。もちろん、日本におる友達も同じ。やから、日本とニュージーランド、どっちの人に聞いても同じ答えしか返つてこおへんわ。そんな中でどうやって決めるつて言うん」

中学三年生の時、高校が決まらずにのんびり構えていた僕を叱責し

た時と同じ口ぶりだった。

僕は言葉を失い、何かを言おうとして口をぱくぱくさせたが、やはり何も言葉は出てこなかった。母の言い分は正しい。僕は何を言ってるんだろっか。

しばらくの沈黙の後、ごめん、と謝った。

「時期が時期やから、ちよい焦つとつて。変な事聞いたわ、ごめん」
「ええか？ 新夢、自分の将来はちゃんと自分で決めや」

分かつとるよ、と気の抜けた返事をして一方的に電話を切った。この言い方は昔から変わっていない。これ以上責められるのも嫌だったし、すぐに話を切ったほうが楽だった。逃げただけのような気もしたが、自ら否定した。

どうすればいいんだろう（ホワット・シュッド・アイ・ドウ）。

「僕は何をしているのだろう（ホワット・ハヴ・アイ・ビーン・ドゥーイング）？」と同じぐらい、面倒臭い質問。ダウンナーが重苦しく空気を包む。この公衆電話の半径一メートル以内に黒いヴェールがかかっているような感じだった。僕は気を紛らわすために、再び国際電話の番号をダイヤルし、日本の友達に電話をかけた。馬鹿話に花を咲かそうと思っていた。ただひたすら、とにかく、何かしてないと落ち着かない気がした。

「あ、浩二？ 久しぶりやな！ うん、むっちゃ元気。こっちは桜咲いとるわ。日本もやっと涼しくなつたぐらいやろ。え？ ああ大丈夫、そんな大した熱じゃうかつたし。食って寝て音楽聴いとりや治つたわ。さすがにあなどれんで、ニューヨークランド。おう、もちろん。平気平気、そんな心配せんでええって。いやホンマに大丈夫やし。かわいい女の子に看病してもらえたら良かったのになー。…は？ おいおい、ちよい待てや、俺はまだシングルやつちゅうねん。彼女なんかおらんよ。何勝手に人の経歴捏造しとん。あ、佐由香と新次郎はまだ続いとんの？ うん、ああ、そーいやそーやったな。ほんなら今はドイツかー。いっそあつちで結婚でもすりゃええのに。お土産にベルリンの壁の破片でも頼んどこかな。ははっ」

カフェテリアで友達と一緒に夕食を食べ、部屋でデヴィルスティックの練習をした。ニュージールランドにはレベルの高いデヴィルスティック使いがストリートに大勢いるので、僕もそれを目指して挑戦しているのだが、どうしてもプロペラの逆回しが出来ない。曲芸師になるつもりはないが、ただの趣味でここまで続けられるのは飽き性の僕にしては珍しい。

プロペラの逆回しを練習しながら、ぼんやりと日本を思い出した。半分放任状態の両親は僕の進路についてあまり口出しせず、「自分で決めなさい」が常に口から飛び出している。だから人生の色んな選択肢をほとんど一人で決めてきた。でも実際僕は優柔不断で、その上嫌だと思った事は絶対にしない性分だったので、テスト前にもあまり勉強せず、見た事はないが偏差値は四十台だったかも知れない。ほとんど無い燃料で、胴体着陸目前で、それでも地面すれすれで辛うじて飛んでいた僕は、とにかく進めるならどこでもいいと、一番の強みである英語を利用してニュージールランドへやってきた。

日本にいる間は、外国に住むなど考えもなかった。

実家へ手紙を書いたり電話をする事もほとんどないので、これから先の将来については本当に僕が単独で決めなければならぬ。まるで中学生のような悩みだ。

デッキから流れる坂本龍一のCDを抜き、新たにローリング・ストーンズを入れた。僕の大学の先生の中にリアルタイムのストーンズファンがいて、ビートルズのクライストチャーチ公演の時に四人に向かって生卵を投げつけたらしい。その話を最初に聞いた時は涙がにじむほど笑った。

CDが始まるのとはほぼ同時に、部屋のドアがノックされた。力の無い返事をする、入ってきたのは予想通り、練習帰りなのかまだユニフォーム姿のニルスだった。

「デヴィルスティックなんて、随分久しぶりにやってるんだな」

暇つぶしに遊びに来たらしい。別に大した技はできないし、基本のトリックぐらいしか攻略できていない。それでもニルスはじっと見物していた。彼もデヴィルスティックができるから、よく二人で練習することがある。

「どうしたの、こんな時間に」

僕はデヴィルスティックから目を離さずに言った。ニルスは僕のベツドに座り、手にしていたラグビーボールを空中に飛ばしたりくるくる回したりして弄んでいたが、しばらくして表情をゆがめて言った。

「お前、俺の事、無茶で無謀なやつだと思ってるだろ」

突然何を言い出すのかと、僕は「はあ？」と突拍子も無い返事をし、デヴィルスティックの手を止めた。彼の表情は、組んだ膝の上についた頬杖で変に歪んでいて、端から見れば面白かった。

「無茶だの無謀だの、俺、いつそんなこと言ったっけ」

「いや、言っていないけどさ。アランが最近、それっぽい発言をしてるなって」

「別にそういうつもりはなかったんだけど」

「ラグビーもやるし、勉強もするし、って、優柔不断で一気に片付けたがりの馬鹿だと思ってるだろ」

優柔不断インディサイングという言葉が僕自身も妙に痛かった。そういえば前に寿司屋で、勉強とスポーツの両立はやめておけと諭した事がある。やった事はないが大変だろうし、彼の身が持たないかも知れないと不安だったから言っただけで、あからさまに無茶だと言い張ったつもりはなかった。

どう返答すべきか英単語を選んでいると、ニルスが頼りない溜息をついた。スポーツマンの彼に似つかない、年寄りくさい息だった。

「いくらなんでも両方取るうとは思ってないって」

頬杖をついたまま、完璧に呆れきった表情をしている。そんなニルスの姿が何となく、珍しかった。レア映像としてビデオに録画して

おきたかった。

ニルスは指先三本ほどでラグビーボールを回しながら、理由を並べた。

「勉強しながらラグビー、なんていくらなんでも無理だと思ったよ、最初は。でも在学中、俺は少なくとも後悔しない程度に勉強した。忙しい傍らラグビーも練習した。悔いは無い。だからそろそろ決めようと思ったんだ」

こないだ、アランがそんな事訊いてきたから、なんとなく気になってたんだ、とニルスは頬を掻いた。確かにニルスはかなり頭がいい。驚異的だと思えるほどの勤勉家、ストレートAの秀才だ。英語以外は限りなく底を叩く成績だった僕とは全然違う。それでいて、ラグビーの腕もいい。十分今からプロとして活躍できるんじゃないかと思うほどだ。それなのにどうしてか、大学に何年も居続けて、ずっと勉強している。僕から見ても彼が経済学かラグビー、どちらを選ぶかさっぱり分からなかった。

僕としては、ラグビー選手になった方が絶対いいと思ってはいたが。ニルスは軽く嘆息し、

「俺、日本に行くよ」

と、祖国の名前を紡いだ。

背筋にヒヤリとしたものが伝う。

持っていたスティックがカランと床に落ちた。

明治憲法期の大日本帝国、古くの倭国、邪馬台国、奈良時代から呼ばれるようになったニッポンというその慣れ親しんだ呼び名。

僕はしばらく無言で立ちすくみ、数秒後、ぐらりと身体が傾いて机に寄りかかった。につぼん。ああそうだ、僕の国だ。二年前、僕がこのニュージーランドに来る前にいた国だ。

目の前がふらふらする。ニルスの視線が突き刺さる。教会の鐘が頭の中でぐわわんと鳴り響き、波紋のように広がって鼓膜の奥を震わせる。やばい死ぬ、と一瞬思ったがこんなもんで死にやせんとすぐに正気に戻り、混乱状態から自力で現実に戻った。

たつぷり十秒ほど間を置いて、僕は油の足りていないブリキの木こりのような動きでぐぎぎと体勢を立て直し、平然としているニルスをにらみつけた。

「何を言うとか、アホ」

「アホって言う奴がアホなんだぞ」

それは僕が教えたジャパニーズジョークだ。

「あのですね、ニルスさん。日本に来るって一体それはどういう風の吹き回しでございますか？　日本でラグビーでもやるつもりですか、それは絶対無理、日本はサッカーと野球の国だから。ルールどころかみんな人間タワー作ってボールを奪い取るとか、そんな根本的な事すらまずほとんどの人が知らないから。日本に行けば桶屋が儲かるとも思った？　延々夢見すぎなあれだよ、教えただろ、プロヴァーブ。先が長すぎて全然あてにならない期待をしてたら意味が無いんだって。空気汚いし海に毒物垂れ流してるし、金だ憲法だ自衛隊だ行革だうるさいし。どこもかしこも京都みたいに煌びやかで舞妓さんがうろうろしてて年中神輿がえんやこらしてるわけじゃないんだから」

必死になつて祖国を非難した。ニュージーランド人にとって居心地のいい場所とは思えない。国土の広さはさほど変わらないくせに、ニュージーランドの総人口は大阪の人口にも満たない。出汁に命をかける薄味の日本食も彼に合うとは思えない。湿気の多い夏の灼熱地獄も耐えられないものだろう。

ニルスは軽く首をかしげていたが、しばらくして僕の幽霊のような表情（だろっ、たぶん）を見ながら溜息をついた。

「そんなに必死になつて引き止めてくれちゃって、俺に惚れた？」

「阿呆抜かすな」呆れに目を伏せる。

「別にいいだろ、日本に行きたいって前から何度も言ってたじゃないか」

「行くだけならまだいいよ。もしかしくなくてもニルジー、日本で就職して暮らそうとかとんでもなく風待ち桶屋なこと思ってるだろ」

「もしかしくなくてもご名答」

今度は蹴りを入れた。足の裏で彼の顔面を弾き飛ばす。日本じゃないんだし、靴を履いていれば良かった。一瞬後ろに傾きかけたニルスは、鼻の頭を押さえながら、臭いお前の足で蹴られてもマゾじゃないから嬉しくない、と文句を垂れた。

風待ち桶屋め。僕と大して変わらないじゃないか。

そう心の中で罵ったが、しかしそれは数秒で崩れ去った。

「別に無目的に日本に行くわけじゃないんだけどさ」

ニルスが言い訳めいた口ぶりで言って視線を泳がす。

「アランから日本語はたくさん教えてもらった。基本的な挨拶みたいなものしかまだ分からないけどさ。それでも構わないから、最初は全然喋れなくても構わないから、日本に留学して、バカみたいに日本語を勉強して、また戻ってくる。そして俺は日本語教師になるんだ。すぐそこにある女子校、名前忘れたけど、日本語のクラスがあっただろう？ ああいうところで、子供や社会人相手に日本語や日本文化を教えたい。ニュージーランドに戻ってきて日本語教師をやっても、日本に残って日本人に英語を教える教師になっても、どっちでもいいんだけどさ。とにかく教職をやりたい。日本に関わりたいたい」

拳を強く握り締め、熱っぽい口調で語るニルスの目はぎらぎらと光っていた。理科の実験や学校行事に瞳を輝かせる小学生のようだった。どこことなく子供っぽくて、純粋で、好奇心に溢れていた。

僕はそんな彼の瞳をじっと見つめた。彼は立派な目的を持っている。僕が海外の大学に留学してまで探してもまだ見つけれない、将来の目標を。生き甲斐を。ニルスは既に、己のものとしている。

何だか悔しかった。異様に悔しくて、羨ましくて、誤魔化すために邪魔な前髪をかき上げた。羨みがふつふつと沸き出してくる。羨みだけで温泉旅館ができそうだ。しかし、悲しいかなスパのように熱く健康的で人々に癒しを与えるものではなく、そこはかとなく冷たい、氷のような湧き泉。凍てつくような羨み。

悔しい。自分が悔しい。情けない。ニルスにひどく引け目を感じ、僕は彼から顔をそらした。理由を何となく察しているのか、彼は何も訊かなかった。それでいい、それが救いだ。

——このまま劣等感に飲み込まれたら、保身のためにニルスを蹴落とそうとしそうで怖かった。

救いようがない馬鹿だ。何やってるんだ、馬鹿野郎。「となりのトロ」で、母親のいる病院への道も知らずにただひたすら駆け出していたメイと同じだ。僕だって適当に歩いている。そのうち道に迷うのだろうと分かっているながら。

倦怠が身体を蝕む。その過程をじつと見守りながら、足元から這い上がってくる気色の悪い虫たちが自分の肌を喰らうのをされるがままにしている。

「頑張れよ」

ふらふらの思考で、ただそれだけ伝えた。精一杯の笑顔で。ニルスは少し戸惑った様子だったが、ああ、と返事をする、課題が残っていると言って部屋に帰った。

ドアが閉まった直後、僕は物凄い嘔吐感に襲われた。慌てて洗面所に走ったが、単なる吐き気だけだったらしく、洗面台に顔を突っ込んでけけほつと数回咳きをしただけで何も出てこない。だらしくよだれを垂らして、必死で呼吸した。幼いメイは迷子になる。さつきと猫バスに助けてもらうまで泣いている。

ずるずるとその場にしゃがみこむ。リストカットしたくなる人の気持ちはこういうものなのだろうか、僕はぼんやり考えた。

僕は何をしているのだろう（ホワット・ハヴ・アイ・ビーン・ドゥーイング）？

永遠に繰り返されるプロポジション。僕の正気を駆逐する、このおぞましさ。

5 大切なひと

二年前、アリシアが義足をつけて初めて僕の前に現れた時は絶句した。

僕とニルスが大学の裏庭の芝生に座りこんで読書を楽しんでいる時、いきなり「わっ」と大声を出して僕ら二人の背中をどついたのが彼女だった。僕もニルスも嬌声をあげ、慌てて振り返っていたずらの主がアリシアだと分かると、疲れたため息をついた。

もちろん、すぐに彼女が両足で立ち上がっていることに僕は気付く。「アリシア、車椅子は……」

「これは義足よ。やっと完成したの。ずいぶん時間がかかったけど、これから走る練習とかして徐々に慣れていかないかね」ポニーテールを風に揺らしながら彼女は満面の笑みで立っている。二本の足で力強く、芝生の上に。

病室でよれよれの服を着て、傷んだ髪と荒れた肌が哀れだった女性の姿はどこにもない。タンクトップにすらりとしたジーンズ、しなやかな髪をポニーテールにして結び、薄化粧をしている。その右足はすでに肉体とは違い、人工臭さが漂っていた。

ニルスは感嘆の声を漏らし、もう歩くことはできるんだね、と言った。

「アリシアのことだから、早々になってぶっ壊したりするんじゃないか」

「ちょっとお、私が物を破壊しまくるお転婆娘みたいに言わないでよ」

「実際それに近いと思うけどな」僕がぼそつと呟くと、後頭部にデコピンが飛んできた。もちろんアリシアだ。

彼女はよろめきながら芝生の上に座り、膝を抱える。ニルスは彼女の方に上半身を向けて、使い心地はどう？ と聞いた。

「順調よ。少しずつ調整していく必要があるけど、普通に歩くぐら

いなら今でもできるわ。自転車には乗れないからこれから学校へはバスを使うことになったけど、それほど不便してないし。これからどんどん使いこなせるようにならなきゃ」

「強いよね、女の人って」僕はそう言って笑った。「いつも前向きにとらえてる気がするよ。君の場合は特に、自分の力を適度に信じてる」

「あはは、そうかしら。でもありがとう」

「無茶はするなよ。辛かったら車椅子で移動したっていいんだし、誰もそんなこと咎めないよ」

「ダメ、私が咎めるの。いい？ 日本のヒロタダ・オトタケは、小学校の運動会のレースに両足がない状態で出場したのよ。もちろんよちよち歩きたいなスピードだけど、それでもゴールしきったの。きちんと自分のゴールさえ見極めていれば、足なんかあってもなくても同じよ。足がなくなったら手で歩けばいいし、手がないギターストは歯で弾けばいい。人間、考えりや不可能なんてないわ」

どこで乙武さんの話を耳にしたんだろう。アリシアはそんな僕の疑問もそっちのけでふふんと鼻を鳴らし、我こそはナポレオンとばかりに不可能を全てひっくり返そうとしている。

僕は心から彼女を信頼していると同時に、無関心になることはできなかった。心の強い女性は美しい。自己嫌悪に駆られ、卑屈になりながら生きている自覚を既に持っていた僕は、この当時は純粹に、他人の幸せを心から喜べる人間だった。ずいぶんとマシな性格だったと思う。

アリシアは、さつてと、と叫んで急に立ち上がり、腰に手を当てて僕らを見下ろした。顔いっぱいの子供のような笑みを浮かべて。

「私も学校に行けるようになったし、快気祝いとしてご飯を食べに行きましょう！ もちろん二人の奢りでね」

「おいおい、当の本人が快気祝いとか言って人に奢らせるのかよ？」ニルスが突っ込むと、そんなことは気にしないの、とアリシアが笑ってひらひらと手を振る。

面白かったし、異論はなかった。僕も立ち上がり、ジーンズのポケットに財布が入っていることを確かめて「それじゃ豪勢に日本料理でも食べに行きますか」と言った。結局僕が食べただけなのだが、ニルスもアリシアも日本料理に抵抗がないので問題はない。

右の拳を空に突き上げ「では皆の衆、腹ごしらえといこうか！」と叫んで、ニルスが先頭に立ちグラウンドの出口に向かって歩き出す。その後ろをアリシアがきちゃっきやつとはしゃぎながらついていく。これじゃ鴨の親子と変わらないじゃないか。僕が肩をすくめて苦笑すると、アリシアが足を止めて振り返った。そういえばさ、と彼女が笑顔で話を切り出す。

「私ね、入院した時からずっと言おうと思ってただけど、あなたたちにはすごく感謝してるの。入院中も車椅子で移動してる時も、あなたは一度も私に「頑張つてね」とか「かわいそうに」とか、言わなかったでしょう？ 頑張れなんていう言葉ほど無責任なものはないわ。私にかわいそうとか言うバカも一緒。嬉しかったよ、新夢やニルスが私に何も言わずにいてくれて、それが信頼されてる証拠なんだなあって元気づけられたもん。初めて会って日が浅い私を無下に扱わなかった。それが嬉しいの。最高の友達の証拠よ」

アリシアは僕に気をつかって、ゆつくりと丁寧に発音してくれた。ニルスにも聞こえていたらしく、こちらを振り向くことなくクスクス笑ってる。無垢な笑顔を惜しみなく見せるアリシアに、僕も笑い返した。

僕はその言葉を、一生忘れない。

アリシアの住んでいるウールストンへはメトロバスで行ける。アイラムからシテイの発着所を経由してイーストゲートモールまで乗り、そこで彼女に迎えにきてもらう予定だ。モールからアリシアの家へは徒歩でも数分で行けるが、僕とニルスはまだ道を覚えていない。

僕はモールの正面エントランスで煙草を吸ってアリシアを待った。ニルスはスポーツマンなのに煙草は一日最低二カートンは吸う。並みの人間の五倍は食べ、ニコチンで肺は真っ黒、でもラガーマンでストリートAの超秀才。こいつのことは時々よく分からなくなる。日本より文字が大きくて限界まで強調された「煙草はあなたの死を招きます、肺がんを引き起こします、胎児に影響を与えます」の警告文が書かれたケースを片手に、銜えた煙草をめいっぱい吸い込んで、唇の間から吐き出した。僕は普段、そんなに吸わない。多分、一ヶ月に一本吸えば多い方。

「大阪屋（Osaka-ya）？ キヤシードラルの反対側のあれか。あそこタダ飯とタダ味噌汁あるからいいんだけど俺ってば味噌苦手。食に関する日本人的考えかたって時々謎だよ。健康的でいいと思うけどさ、なんでも出汁とって薄い味付けなのはかなり勘弁」「それはお前がこっちのファスト・フードを食いすぎてるからだって。いつかコレステロールで死ぬぞ」

「文化の違いってやつだよ」

「まあ、それは仕方ないけどね。寿司を食えよ。すっかりワールドワイド、日本が誇る人気料理代表なんだし」

ニルスに日本料理店で気に入ってるのがどこかと聞かれて、素直に大阪屋だと答えたら、見事に倍返しにされた。大阪は実家の近くだし、日本人が営業してるから料理も限りなく日本風に近い。ニューヨークで日本料理店の選び方を間違えると、こっちのオーストラリア米で作られたとんでもない御飯や寿司が出てくるから、日本人の僕にとってはもつと勘弁な話だ。

濃い味のニューヨーク料理で育ったニルスにしたら、日本料理は舌先で味すら感じないものかもしれない。身体の組織のほとんどが勉強とラグビーと食べる事で構成されてるんじゃないかと思われる彼は、イーストゲートモール前の入り口の柱に背をもたせ、寿司は好きだけど、とこじつけがましく付け足した。

「でもこっちはオーストラリア米だから、日本の寿司が食べてみた

いな、本場の。職人が握ったやつの方が美味そう」

「オーストラリアの米は水分足りてないけど、日本米はもつとこう、例えるならもち米みたいな感じだけど、それでもいいわけ？ 甘味あるし、もつとふつくらしてるし、もちろん俺はそっちの方が好きだけど」

ライスケーキ

ロウフィッシュ

「もち米？ それに刺身を乗つけるのかよ、やっぱ変だな、日本人」
「変ですいませんねえ、変な日本人は俺だけじゃないんで」

ライスケーキの例えはちよつと悪かったか。

英米人はロウフィッシュが嫌いな人が多い。内陸の人間なら生で魚を食べるなんて考えられないのかも知れない。クジラはともかく、タコを食べる日本人を気持ち悪がる外国人はたまにいるし、巻き寿司には欠かせない海苔を「黒い悪魔」と罵る人もいる。しかしニルスも、ロウフィッシュは寿司で鉄火巻きにしたら食べられるというからそっちの方が変だ。

煙草を吸いながら寿司の事を考えるのもなんだか口の中が気持ち悪かった。

靴のつま先で潰して火を消した煙草をそのまま捨てるわけにもいかず、それを拾って灰皿を目で探しているところへ、はるか遠くから僕ら二人の名前を呼ぶ爆音のような声が聞こえた。こっちが吹っ飛ばほどこかなりの大音量で響いたはずなのに、声の主のアリシアはパーキングエリアのさらに向こうで手を振っていた。どんな肺活量をしてるんだ、あいつは。僕とニルスは顔を見合わせて苦笑した。

車から降りて走ってくるアリシアは、かわいいピンクのワンピースを着ていた。「ちよつと遅くなってごめんね」と謝りながら、彼女はモールの中に入っていった。

「何か買って行くのか？」訊いたのはニルスだった。

「材料、足りない事が分かったの。ちよつと買い足していくだけだから、付き合ってくれないかしら」

「もちろん構わないけど、時間は大丈夫なの」

「平気よ、ニルスは九時まででしょ？ 余裕余裕」

そう言つてのける彼女は既に自動ドアの内側に駆け込んでいて、僕らは従者のように後ろをついていった。入つてすぐの場所に設置された灰皿に煙草を捨てる。食料品店のゲートを押し開き、日本のデパートのものより二倍ほど大きいカゴ二つとカートを持った。ニュージーランドでは商品も尋常じゃないサイズだから、それを入れるカゴも大きく作られてある。

天井が高くどこまでも積まれてある商品の間を通つていくうちに、アリシアは実に色んなものをカゴに放り込んでいく。ちよつとだと言つておきながら一体何ドル分買うのだろう。カゴの中身で大体メニユーは予想がつくが、しかし一人暮らしにしてはまたアリシアもよく食べるものだ。白人の常識はアジア人である僕の感覚では到底理解できないし、理解したところで何も利害を産まないのだから考えたくなかつた。

思えば、日本では比較的背が高い方である僕も、女性のアリシアに比べたらほんの五センチほどの差しかないし、ニルスに至つてはガリバー旅行記のようなものだから、白人とアジア人の感覚の違いというものはまず視覚から瞬時に分かる。主食がパンかご飯かここまで違う。

レジのベルトコンベアーに商品に乗せていくアリシアを手伝つた。ベルトコンベアーで流れていく商品のバーコードを店員がひたすら読みとつていくだけで、ようするに作業の効率化をはかっているのだらうが、傍から見ていてなんとなく非合理的に見えるのは、僕がまっただけならレジばかり見てきた日本人だからだらうか。

すべて乗せ終わりに、区切るためのバーをコンベアーの上に置きながら、視線だけちらりと彼女に注ぐ。日本のブランドの化粧品を使っていると言つていたが、彼女の唇が宝石のようにきらきら光っているのを見て、かわいいな、となんだか後輩の女の子を見ているような気分になつた。実際彼女は年上で、とくに大学なんて卒業している。しかしまるで子供のようなその無邪気さと、時々見せる相反した大人の表情が、彼女の美しさを際立てている、そんな気がした。

無意識にポケットに手をつ込み、天井を仰いだ。

ものすごい荷物だ。

あれだけ買ってりや当たり前か、と僕は肩を落としながら、アリシアが買った物袋を後部座席に積み込むのを手伝った。車はホンダで、ニュージージーランドの車の九十パーセント以上を占める誇り高き日本製だ。バスと衝突事故を起こして足を切断し、拳銃に母を失ったトラウマは一体どこへ。それを隠しているのか、それとも本当にトラウマなどないのか、今でも義足で元気に運転している。

僕は助手席に、図体のかいニルスは後部座席に座り、アリシアが運転席。ここから彼女の家へは全く離れちゃいない近所なのだが、何せ荷物が多いからいつも車だという。イーストゲートから彼女の家へ着くまでの数分間、僕はブレーキの上に乗せられた彼女の右足を何度も横目で見ていた。

車はウールストンの通りに面したワンストリーの家の敷地内へ入り、庭の奥の車庫へ乗り入れた。庭には野菜が植えてあり、樹も何本かあって、日本の家とはかなり違う。靴を脱がずに居間へ上がり、僕らが買った物袋をテーブルに広げている間にアリシアは暖炉に火をつけた。これで暖房よりずっと家中が暖まるから不思議だ。

「日本って人口がニュージージーランドの何百倍もあるから、車の量も多いでしょ。それでいて暖炉なんてものもないんだから、空調と排気ガスで温暖化に総攻撃状態ね。日本もそういうところ、進歩しなきゃいけないと思うの。産業や技術は世界レベルなのに、おろそかな点が多いからアウト。いちニュージージーランド人の考えだけだね」最初にアリシアがそう語っていたのを覚えている。暖炉もそれなりに大気汚染になりうるのかも知れないが、僕はあまり詳しくない。全国民が呼吸するだけで環境破壊になりそうな人口爆発中の日本と、オゾン層のないニュージージーランドとは価値観が違う。

僕とニルスは買った物袋の中身をアリシアと一緒に戸棚や冷蔵庫にしまい、その流れで料理に取りかかった。僕ら二人は何度かアリシア

の家に食事に招かれ、そのたびにこうやって一緒に作ったりしていた。料理の手を止めないまま、たわいもない会話を繰り返して、絶えることなく馬鹿話をした。僕一人が日本人で、しかも一番年下で、これだけ頼りなくつまらない男だというのは、ずっと仲良くしてくれる友達が今ここに二人もいるということだけで、何だか嬉しかった。

「そうよ、折れない程度に軽くねじって、そのまま一気に手を離して」

初めて挑戦するスパゲティだったが、緊張しながらもどうにか鍋に綺麗に広げることが出来た。花火のように散った麺を見てほっと一息つき、うまいうまい、と笑顔で手を叩くアリシアの言葉に苦笑が漏れた。

「いつも思うけど、新夢は初めて作る料理でも呑み込みが早いわ。実は得意だったりするんじゃないの？」

「まさか。ニュージーランドに来るまで、台所に立ったことすらないよ」

そう弁解すると彼女に声を上げて笑われた。事実、ニュージーランドで寮生活を始めてからずっと大学のカフェテリアで食事を済ませていたのを、アリシアと知り合ってから何品も彼女に教えてもらった。もろもろの理由でニュージーランド料理に慣れずにいた僕にはある意味きつい話だった。

細かい作業を二人で一緒にやっている、休憩して水を飲んでいたニルスが面白がってからかってくる。

「お二人さん、あんまり接近すると、夜には熱い吐息が肌にかかるくらい密着する羽目になるから、やめときな」

その言葉を聞いて、しばらく硬直した僕らはマツハの早さで同局の磁石のように瞬時に離れた。アリシアは顔を真っ赤にしてニルスに殴りかかる。その拳を受けながらけらけら笑うニルスを僕は一人呆然と見つめて、そういつつもりじゃなかったんだけどな、とぼんやり思い、また鍋にくるりと向き直った。頬が紅潮してるのが分かる。

確かにアリシアはかわいいと思うが、国籍も違う年上でどうも引いてしまう。古今東西、僕の運命の女性なんて金輪際いないと思い続けてきたから、余計に遠慮がちになる。

高校時代にクラスメートの女の子に告白されて付き合ったことがあるが、数ヶ月もしないうちに一方的にふられた。元々恋愛に対しては奥手で、中学生ぐらいから仲間内でエロ本を読んでいたりしていたが、周囲ほど異性に興味があつたわけでもなく、かといって同性にも興味がなく、告白された時は正直驚いた。まあいいやと軽い気持ちで付き合ってみたらば、「なんか頼りない」という言葉を吐き捨てて彼女に別れを告げられた。頼りない。素晴らしく僕の人間性を理解している女の子だと思う。

異性と付き合ったのはその一回こっきりだ。女友達はいるがその先に踏み込んだことはない。

そりゃ、彼女は欲しいけど。ニルスに言われたくないってば。

出来上がった夕食はスパゲティをメインに、いくつかのサイドディッシュを添えたものだった。料理をテーブルに並べ、モールで買ってきたワインをグラスにつぐ。乾杯をして一口飲み、また喋りながら食事をする。いつだって話題は絶えないし、もっと話す時間が欲しいぐらいだ。僕らはそうやって二年間を共に過ごしてきた。

サラダをフォークで突き刺し、アリシアが嬉しそうに笑った。

「私、ひとつ就職先が決まりそうなのよ」

そのアリシアの報告に、本当？ と叫んで僕とニルスは目を見開いた。彼女はこれまでいくつもの会社から拒否されてきたのだが、ようやく見つかったというなら喜ばしいことだ。彼女は笑顔で話を続ける。

「そんなに大きなところじゃないけどね。細かい動物のガラス細工とか、手作りの小物やオーナメントを売っている小さなお店よ。ほら、私、アートセンターで自作のアクセサリーを売ってるでしょう。現品を持っていったら、手先の器用さが買われて、今度詳しい話をしようって言われたの」

「その足でも大丈夫なんだ」

「一応ね。ほとんど座りっぱなしだし、立ち仕事でもないから支障は出ないだろうって。細かい作業を延々と続けるだけだから」

「いいと思うよ。ポジティブな面で考えれば、天職だ。君なら採用されるよ、絶対」と僕が言っていると、彼女は嬉しそうに笑って、そうよね、と答えた。

彼女は戸棚に並んだ小さな木彫りの置物やビーズ細工の飾りを指差した。そのお店で買ったものよ、と説明する。多種多様のマテリアルで作られた、女の子向けのかわいい雑貨や小物を見て、これは確かに彼女のアクセサリー作りと同じ職種にカテゴライズされるのだろうと思った。普段の仕事ぶりから見て、ひよつとしたら才能が買われて本当に就職出来るかもしれないと僕は期待した。

「大丈夫だよ。こういうのは君の得意分野だろう。向こうさんも、君の創作力をみすみす逃すつもりはないと思うよ」

スパゲティを巻きつけたフォークを軽く振りながらニルスが笑って言う。僕も同じ意見だった。アリシアは笑って、採用されるといいんだけどね、と肩をすくめた。まるで歌手のオーディションに出向く前の女の子のようだった。

その時、本当に本当の心から喜んでいない自分に、僕は何となく直感で気づいていた。これまで自分の胸をギリギリと締め付けていた痛みがさらに増したような錯覚。

……罪悪感？ 嫉妬？ 悲壮感？

天井を仰いでため息をついた。一生分かと思うほど長く息を吐く。何がしたいのか分からない。

食器の音が小さく鳴る中、アリシアはフォークを皿の上に置き、笑いながら、ごちそうさま、と言った。

「新夢の作ったパスタ、美味しかったわよ。初心者にしては上出来なアルデンテね。またお願いしようかしら」

「おいおい、褒めて伸ばそうっていう年じゃないだろう」僕は口元に運びかけたグラスをテーブルに置きながら笑った。「君たち欧米

人より背が低いからって、毎度毎度、人を小学生みたいに」

「その被害妄想はどこから来るのかしらね」

彼女の言葉にニルスが、こいつは身長コンプレックスなんだよ、とほざいたのでテーブルの下で彼の足を目一杯蹴った。悲鳴が飛ぶ。これでも百七十五センチだ、日本じゃ高い方だけど、白色人種と比べるとどうしても差が出る。こっちじゃ女性で百八十もごまんといる。鈍痛に悶絶する彼を差し置いて、食器を片付けようか、とアジアに促す。彼女は口元に手を当てて苦笑しながら、僕に便乗してニルスを無視し食器をシンクへ持っていく。おいこら待ちやがれ、と背中からうめくニルスを尻目に、顔を見合わせて苦笑した。

時々、自分の考えが分からなくなる。自分でも何を考えているのか、探しても見つからない瞬間がある。自分が悔しくて、愚かさに唇を噛み締める。本物の感情を内包して、どうにでもなればいいと自分に嘘をつき続けている。自分自身を現実世界に釘付けするために、壊れないようにしている。

こんなの、自分勝手だ。

越えられない壁を常を感じている。自分から行動を起こそうとしない優柔不断。僕という人間は、この地上で、人が願うほど必要とされているのだろうか。僕が自覚するよりずっと。

僕の知らないところで、知らない僕が陰に隠れてじっとしている。そいつが僕の背中にぴったりと張り付いて、果てしなく虚ろな眼をしたまま薄ら笑いを浮かべ、僕の後ろから手を伸ばし、腹に両手をぶち込んで内臓をえぐっている、そんな感じ。知らない僕の手が、内臓を掻き回して心まで操作しているような感触がある。けれどそいつは僕の背後にいるから姿が見えない、いや、僕があえて目をそむけている。しかもそいつは、気色悪い笑いを浮かべていながらも黙って涙を流し、そしてまたそいつも「僕」なのだ。

本物の杉山新夢はどこにいるのだろう。食器をテーブルからシンクへ少しずつ運びながら、そういうことに気がついた。多分、今現在のこのニュージーランドに、僕はどこにもいない。

6 後悔と懺悔とそれから無気力

チエツカーズをして遊び、テレビを見て、九時になる十五分前にニルスは寮に帰った。ラグビーの練習があるんだ、とアリシアに説明すると、彼女は腰に手を当てて笑った。

「あの人は本当に何事にも真剣ね。見た目はチャラいのに、ストリートAで一年余分に在学、それでいてラグビープレイヤー。そのうちオール・ブラックスの名選手として名をあげるかも知れないわね」
「どうだろう。ニルスはラグビー選手になるつもりはないらしいしさ」

「先生でしょう？ 前に彼から聞いたわ。もったいないなあ」
ニルスを送り出したまま開けっ放しの玄関を閉め、リビングに戻りながら彼女は苦笑交じりに答えた。僕は少し驚いて、「先に知ってたのか」とソファに腰掛けながら訊いた。座るための家具にしては弾力性が弱く、腰近くまで深く沈む。アリシアは僕の隣に座り、揃えた膝の上で手を軽く組んで、ひとつ浅いため息をついた。

「卒業したら日本に留学して、また戻ってくるんだって、先週あたりに熱っぽく話してたわ。明らかにあなたの影響ね。オール・ブラックスとかカンタベリーに入るっていうのなら大学側はきつと反対したわ。何せニルスはあの成績だから。教職って言ったら誰もが認めるわよ」

「周囲に認められるように留学するっていうのが理由なら、俺は納得しないけどね。ニルスはそんな中途半端な人間じゃない。けれど、前に本人から話を聞いたけど、言葉とか文化とか、とにかく日本に関わることをニュージールランドの子供たちに教えたいって。ただでさえ、こつちと日本は交流深い国同士なのにさ。熱心だよな」

「ニルスはそういう人よ。真剣そのもの。自分にも他人にも、優しく強く接することが出来る」

「羨ましい限りだな」ソファの背もたれに体重を預け、両腕を頭の

後ろで組みながら、喉の奥で笑った。

だから僕はニルスが羨ましくて疎ましいんだ、ということとは口に出して言わない。言わなくても、何となくアリシアに伝わってそんな気がするが。別に遠ざけたいわけじゃないけれど、親友の彼への嫉妬心に近いものを腹に抱えているのが分かる。自分の心の中で、ニルスやアリシアは途轍もなく高い位置にいて、僕はそれを見上げて届かない場所へと手を伸ばしている。今の現状を図解で示すとそんな感じがした。

みんな、凄い人たちばかりだ。僕よりずっと強くて、頑張っている。しかしそれは「悔しい」という感情とは、少し違う気がする。もっとマイナスで、綺麗事じゃ済まされないような複雑な。

「ニルスは私と同じ年だから、つまりあなたより一つ年上でしょう」アリシアが僕の表情を覗き込んで言った。ゆるいウェーブの髪が重力に従って肩から滑り落ちる。僕は前髪を頭を振って払いながら彼女を見て、小さく頷いた。

「だったら、羨ましがって当然じゃない。私たちほどになるとあまり気にならないけど、小さい頃や学生の頃は、一年って大きな差でしょう。数ヶ月違うだけでもグレイドが上なら目上。上級生はみんな自分より優れて見えるものよ。日本だってそうでしょう」

僕は明らかに引け目を感じていますと周囲に分かるオーラでも漂わせているのだろうか。沈む僕を慰めてくれているようなその語調に、どう返事をすればいいのか分からなかった。首を縦に振るべきか、否定するべきか。

全部嘘ならいいんだけど。そうやって現実を優しく裏切ってくれば、こっちだって楽になるのに。

「俺は」声を絞り出すのがやっとだった。「ニルジーを親友だと思ってる」

二年前、初めて今の大学に入学してきた僕を最初に出迎えたのが彼。何もかも違う外国で右往左往していた僕にたくさんのことを教えてくれて、何度も助けられた。そんな彼をニユージールランドで一番の

親友だと思っっているし、信頼している。だから、将来の夢に向かって前進している彼を疎ましく思うなんて、世間的には僕が最悪な友達だと思われることだし、僕自身それは吐き気をもよおす自己嫌悪の原因になる。

僕は、決壊したダムのように話し始めた。

「だから、本当は嫌なんだ。人の成功を妬むのも、逆に賞賛するのも、全部エゴに過ぎないんだから。ニルスはもう自分の目標を決めているし、そのために行動を起こして実現させようとしている。それを聞くとどうしてもさ、自分と比べたくなるんだよ。あいつと違ってこんなにも俺は小さいです、みたいな感じで。みんなと違って俺は小人並みに小さいというのなら、いつそ見えなくなるまで小さくなりたい。ニルスも君も、抱えるほど夢や目標がある。俺にはない。だからみんなが羨ましいんだ。そんなふうに強く生きてみたい。って。俺は自分の弱さに甘えて何も出来なくて、人間として本当に嫌な奴なんだよ。みんなのようににはなれない。みんなのように、強く生きられない」

何もやるうとしてないくせに。

「俺は、嫌な奴なんだ」

繰り返して呟く。掠れてほとんど声が出ていない。僕は何を言っているんだろう。こんなこと、アリシアに言っても仕方ないのに。

一体何がしたいんだ。

僕はどうしてこんなことを言うんだ。

膝に両肘をつき、前のめりになって両手の平で額を支える。自分の愚かしさに引き裂かれんばかりの思いだった。

そんな自分が嫌だけど、そうする以外に術を知らない。

僕は何をしているのだろう。

僕は何がしたいのだろう。

「俺は、君のようにはなれない」

涙が溢れてきそうになるのを必死に堪えて、かすれるような声でアリシアに告げた。彼女は一瞬悲しそうな目をしてぐっと唇を噛み締

めたが、「何を言ってるの」と僕の肩に手を置いて言った。

「私だって義足なんだから、やりたいことがあっても出来ないことの方が多いのよ。あなたはまだ可能性があるわ。そんなに自分を卑下しないで」

「違う。そうじゃないんだ」

時間が経つこと。

自分が少しずつ情けなくなってきた、呪わしくなってきた。

アリシアは頭を抱えて頂垂れる僕の肩にそっと手を置いてくれた。その感触が温かくて、人の体温はこんなに優しいものかと久しぶりに感じた。母親の腕に抱かれていた小さい頃しか、感じなかったはずなのに。人肌を感じると誰でも安心するものなのだろうが、僕はそんな優しさを受け入れる力はなく、アリシアの手の温かみが妙に悲しく思えて、余計にきつく目を閉じた。

背中にぴったり貼りついた真つ黒な「僕」を、直視できない。

「俺は、君の右足を奪った」

自暴自棄になつて、もう、何が口を突いて出てきているのかすら、分からなかった。肩に置かれたアリシアの手が少しだけ跳ねる。

「どうしたのよ、新夢。この右足は、私が乗っていた車が事故を起こして、それで切断を余儀なくされたもののよ。むしろ、あなたは私を助けてくれたわ」

「けれど、俺は君の可能性を奪ったも同然だろう。義足ながらも夢を抱え持つ君と、だらけてばかりの俺、どっちが薄情者に見えるんだ？ 辛かったんだ。君へ酷い事をしているんだろって。五体不自由のない俺がこんな状態じゃ、無言で君を傷つけてばかりだってけれど、どうすればいいのかわからないんだ。夢なんてない、目標もない、やりたいことなんて何一つない。だからといってこのままじゃ、君への懺悔の代わりなんて何も見つからない」

土下座をして解決できる問題じゃない。人を傷つけるということは、想像以上に残酷で、双方苦しくて、途轍もなく痛い。

人間は誰かを傷つけながら生きている、なんて綺麗事があるけど、

そんな言葉は気休めだ。言い訳だ。

顔を上げられなかった。ソファに座り込んで頭を抱え、項垂れたままだった。彼女に、大切な親友のアリシアの心に、深刻な闇を残す結果となってしまうたら、僕は何を捨てて償えばいいのだろう。

大切な誰かのために、生きられるようにしたい。

アリシアはしばらく項垂れた僕に話しかけもしなかったが、それが救いだった。彼女は優しいから、きっと僕の言葉を否定するだろう。もしそうになると、かっとなつて、さらに卑劣な反撃をしそうで怖い。自分を一番守りたがつてる自分が怖い。

静かに時間だけが流れていく、そんな中で、僕は少しずつ嗚咽を漏らし始めていた。涙や鼻水が出てくるが、泣くのはさすがに恥ずかしい、しかもアリシアの前で。自分の愚かさに泣くなんて、かっこ悪い上に男が廃る。けれどどうしても、声だけは抑えられなくて、顔を伏せたまま肩を震わせていた。アリシアに分からないようにと願っていたが、どうやら無意味らしく、彼女はことさら優しく僕の背に手を置いてくれた。温かくて、その優しさに、涙が目尻から溢れそうになった。

僕は、何をしているのだろう。

意を決して顔を上げた。目が腫れていないことを願いながら、立ち上がってアリシアと面面向かう。自分でも驚くほど勇気のいることだった。アリシアは少し怯えているような表情で、僅かに逃げ腰になっている。そこまで僕の剣幕は凄かったのだろうか。僕は喉から漏れる嗚咽を止めようとしたが、無駄だった。鼻の下を手の甲で拭い、奥歯を強く噛み締める。

「俺は」

一呼吸置いてから続ける。

「君のようにはなれない」

やりたいことを求め続ける貴女の姿が、とても美しいから。

アリシアの目が見開かれる。

僕は拳を爪が食い込むほど強く握る。

僕は一体誰なの？

「俺は、君にとっては所詮エトランゼにすぎないだろう。落ちこぼれのジャップだよ。君のように強くなりたいけど、俺がいたら君が傷ついてしまう。卒業したら、手堅く日本に帰らせてもらおうよ。君に迷惑をかけるつもりはないからね」

「違うわ、お願い、新夢」

「もういいよ、アリシア。味方にまわってくれなくても。俺は君の幸せが一番願ってる。だから、俺のことは忘れてくれ」

ソファから立ち上がって反論しようとするアリシアを尻目に、逃げるように玄関を出て行った。家の中から、彼女が何か叫んでいるのが分かったが、聞こえないふりをして走った。

馬鹿か、僕。

何の前触れもなくいきなり話し始めて、いきなり怒って、いきなり逃げて、何事かと思われたに違いない。路地を曲がり、緑豊かな大通りに出る。酷く息切れがして、近所の家の塀に手をつけてしばらく息を整えた。

寒気がして、両腕を掻き抱く。僕は彼女に何を言った？ 風が吹いて、戯れに僕の髪を乱す。人通りの少ない道で、世界から一人ぽつんと置いていかれたような気持ちになり、上下の唇を引き結んだ。このままじゃ、取り残される。

怖くなつて、僕は横風の吹き付ける大通りを、メトロの発着所まで走り抜けた。通りがかったイーストゲートモールのエントランスから、「ブリッジ・オーヴァー・トラブルド・ウォーター」が流れていた。濁流に架かる橋のように、君の痛みを癒してあげる——方法を教えてくれよ、ポール・サイモン。

背後で、真っ黒な僕が泣いている。泣きながら、こっちを振り向けと僕の背中を叩いている。しかし、僕は怖くて拒絶した。前を向いて生きることが、いいことばかりじゃない。

十一月の南半球に春がやってきて、ニュージーランド全土でも美しい桜が咲き始めているというのに、目の前では冷たい風に煽られた

たくさんの感情の冷たい吹き溜まりが、僕を無言でなじっていた。

寮に着いたのは十一時にさしかかった頃だった。辺りで散り始める桜の花びらを見送る余裕もなく、ぼんやりと俯いたまま廊下を歩いていった。どんな表情をしていればいいのかも分からなかったし、何より、顔を上げた瞬間、見慣れた現実の世界が違って僕の視界に写り込みそうで、怖かった。

部屋の鍵を取り出し、虚ろなままそれを鍵穴に差し込もうとすると、なかなか合わずに何度も向きを変えて試行錯誤する。もう、部屋のドアを開けるという日常的で単純な行為にすら、意味のないものにした。

ただぼんやりして何も考えない、この諦念レベル。

やっと鍵穴にはまり、ドアをあけたところで、鍵の音で気がついていたのだろうニルスが隣の部屋から顔を覗かせた。汚れたユニフォームを着たままだった。さっさと着替えろよ。

「アラン、今帰ってきたのか。随分遅いな」

君が出て行ったあとに口論してすぐ飛び出したんだけどね。そう言いたい気持ちを堪えた。こういうことを口走りたくなるのは、どこかに助けを求めている自分がいるんだ。

「長居するのも悪いと思っただし」出来るだけ普通の表情を装って答えたつもりだったが、ニルスの眉がぐっと細められる。こういう変化の察知はやたら鋭い。

「どうしたんだ。声に覇気がないぞ。気の抜けた背の伸ばし方しやがって」

「別に何もないよ。ぼけつとしてるのはいつものことだろう」

「さては、とうとう遂にアリシアとやったか」

どこまで思考回路が飛躍するんだ、こいつは。

「勝手に妄想を紛れ込ますんじゃない。アリシアとちょっと話をし

ただけ」

「話って」

「深刻で、とてもじゃないけど世間様に晒せない話題」目を伏せて肩をすくめた。いつまでこの繰り返しに付き合わないといけないのだろう。

「晒せないって、お前大丈夫か」

「ご覧の通り」

「ご覧するところによると、アランさんはいたく焦心に駆られていらっしゃる様子」

「焦心って何だ、焦心って。そんなに煩ってる覚えはないんだけど」「いいから、話せよ、事の顛末を。煩ってるようにしか見えないぜ、お前のその生気の抜けた顔」

やっぱり鋭い。これは長所短所どちらになりうるのだろうか。この鋭利な直観力は彼のラガーマンの立場的に試合で大いに有利なのだろうが、今現在の僕にとっては勘弁してくれほつといてくれと疲弊するばかりのものだった。

しかし、同時に認めなければならないのは、ニルスは絶対に僕を対等に見ている、という嬉しくも悲しい事実。でなきや遊び相手かからかい相手、総称しておもちや。僕が一方的にニルスを羨んでいることに気づいているのか否か、彼はほぼ僕の将来には関与してこないし、かといって無関心で全くの第三者の体勢でいることもない。ようするに純然たる「気が知れた」友人同士だった。先輩面をかまして僕の成績ややることに散々忠告を浴びせたりすることなど全くない。

このまま気遣って何も問題のないふりのまま部屋へ引っ込むのも、気がしれた友人と信じて露ほども疑わないニルスに申し訳ないと思いい、中に入ろう、と彼を部屋へ促した。自分では分からないが何か神妙な表情でもしていたのか、彼が少し眉をひそめて首を傾げたような気がしたがすぐに忘れ、ニルスの後に続いて入りドアを閉めた。読みかけの本やCDで少し散らかっていたが、まあいっか、ニルス

だし、と開き直ってベッドの上に胡坐を組んで座った。彼は僕と半分向かい合うようにベッドに座り、右足だけ毛布の上で立てた。

呆れたような表情で、何を言うのかと思えば、

「抵抗するからヘッドボードに両手を縛ろうとしたらバシンと一発平手を食らって足蹴にされて嫌われた、とか」

と、実に楽しそうに、焦心疑惑などとうに忘却の彼方へ吹っ飛んでいるような口調で言い放った。愕然としながら「すみません、焦心に駆られてるってこと洗いざらい白状します」と言うと、「別に誘導尋問したくて変態疑惑を口にしたわけじゃないんだけどね、それにお前がそういうタイプじゃないってのは百も二百も承知だから」と手をひらひら振りながらニルスは苦笑と共に答えた。

僕は一部始終を打ち明けた。アリシアの右足が戒めになって、将来性ゼロの自分の存在が愚かしく、彼女を無言で傷つけているんじゃないかという不安は話したことがあるので、アリシアが羨ましくて僕は最低な人間だって怒鳴って出て行った、と大体簡潔にまとめて話した。ニルスのことが疎ましい、という事項はあえて省いて。彼は時々相槌を打ちながら、真剣な目で僕を見ていた。

「何となく、楽になったような気がする。今まで彼女に何も話さないまま二年間を過ごしてきたからさ。内容の是非じゃなくて、言うかわざるかの瀬戸際でふらふらして溜め込んでたことを当事者の前で吐いたってだけで。こうなったら失うものなんて何もないと思うよ。嫌われるのは覚悟の上だ。何にせよ最後には彼女に白状しないといけないことだったろうし。きっと彼女だって今まで何度か、だらけてる僕を横目にこの野郎とか思ってたと思うよ。自分は何も出来ないのにこいつはふらふらしやがって、ってね」

ほとんど投げやりの声で、胡坐をかいたまま背後に手について天井を見上げながらぼんやりと並べた。病人の声だ、俺。自分の言いたいことを言うだけ言って逃げ出すなんて自分勝手以外の何者でもないことと知っているし、これじゃ好きになつた相手に恋人がいるから迷惑だと分かっているし、「自分の気持ちを伝えることが大事」と綺麗

事を盾に玉碎覚悟で告白しに行くバカな中学生と同じだ。

「嫌になるよ、自分が」

己を嘲笑うような苦笑を浮かべて呟いた。ニルスに届いていないようにと願う。彼は彼で、最初と変わらない体勢のまま、まっすぐに僕を見ていた。確認するように視線を天井からニルスに戻し、「軽蔑したろう？」と言った。

「いや」ニルスはベッドの上で立てていた右足を戻しながら否定した。「誰だって、人を傷つけるし、傷つけられるさ。人生の上で必要なことだ。ただ、それを自覚してるかどうかによって人間性が分かれる」

まるで既に人生の何たるかをすっかり見てきた偉人のように、堂々とした声でニルスは正論を並べた。そこに迷いや騙りはなかった。

「誰にでも優しくしてる人間なんていない。いたとしても、心の奥の方じゃ少なからず周囲の一人ぐらいに嫉妬や疑心を抱えているものだ。口に出さないだけで。人間ってのはそういうつまらない生き物だ。お前だってそうだろう、アリシアにいくら優しくしたって、断罪されるべきことは片付けられない」

ニルスは何かを思い出すように天井を仰いだままだった。彼の過去についてはあまり詳しくないし、訊ねないし彼も話さないが、彼も彼なりに爪跡の深い過去や、何ものかに対してのひどい罪悪感や羨みを抱えて生きているのかもしれない。確証はないが、そんな気がした。

そう感じると、今までニルスに対しても劣等感を抱いていた自分の感情が、急に情けなく感じた。そして、劣等感と嫉妬と羨望は紙一重なんだと思った。

「俺たちはみんな残酷だよ。そうやって、何かを失いながら生きて何かを得ようと願うんだ。本当に何かを失うかも知れないけれど、その傍らで必ず俺たちは何かを得ているはずなんだ。だって、必ずしも得ることだけが幸せじゃない、失うことが幸せに繋がるケースもある。とりあえず、今のまま日本に帰るな、馬鹿野郎。放ってお

いてもぶっ壊れるものだったら、いつそ自分の手でぶっ壊すぐらいの勢いでいなよ。アリシアが好きなんだろ？ とつとと自覚して、自分に正直に厳しくなれ。今自分がどうするべきなのか、ちゃんと考える」

最後まで言い終わらないうちに立ち上がり、じゃあ部屋に戻るから、と言いながら片手を挙げて、ドアの向こうへ出て行った。静かに閉まったそのドアを見つめて、しばらくぼんやりとしていた。会話を失って急に場がしんとなり、ニルスがここにいたという事実すらフェイド・アウトして空中で消滅してしまいそうだった。

少しだけ目を伏せた。思春期真っ只中の高校生みたいで気持ち悪い。おそらく僕は、人に嫉妬する力より自分の無力さに歯がゆい気持ちの方が強いのかも知れない。ずいぶんと空しいことをしてきたな、と思った。どこかできつと何かが壊れてしまっただろうと分かっているが、何かをするほか、何もできなかった。

7 僕の知っている未来

ふらふらのまま朝の授業に出席した。つとめて普段の平静を装っていたつもりだが、どうやら周囲の友人たちにはもの見事に筒抜けだったらしい。どうした、気分悪いのか、顔色悪いぞ、と友人たちから散々に攻め立てられた。最初にこの大学に入学した時、比較的珍しくもないジャパニーズが紛れ込んだというだけでこの世の終わりかと思うほど詰問され、まるで転校生がやってきた時の小学生のようだった連中だ。当初、そこまで僕に関心を寄せていた——関心という表現はアウトかも知れないが、無関心よりまあいい——彼らが、今こうして当時のデジャ・ヴュのように僕を心配するのも、脳が忠実に覚えているからなのだろう。別になにもないって、心配すんなよ、と適当に笑って話題を無理やり切り替える。アリシアと直接関係のある友人はここにはいないのだから、無理に彼らに相談して余計に心配を肥大させたくない。

「そういえば、アラン」

友人の一人が、はっと息をのんで思い出したように言った。忘れてた、と彼は呟き申し訳なさそうに続けた。

「語学学校の先生が、お前のことを呼んでたぞ。同じ教室だから知らせておくって言ったきりだった。ごめん」

「いいよ、全然」僕は笑って腕時計を見た。「授業までまだ少し時間があるよな。俺、行ってくるから。先生が来たら、語学学校の棟に行ってるって伝えておいてくれ」

今度は忘れるなよ、と含めるように言い残して、さも面白そうに笑う彼らに手を振りながら教室を出た。

語学学校はこの大学付属の留学生向けの教室で、敷地の裏手にあるテクニカル・ルームの北側に位置している。一階建てのおしゃれな建物で、入り口に「教室内は英語必須」と貼り紙がある。静電気に気をつけながら正面玄関のドアを開き、受付の女性に挨拶をする。

左右正面と三つに分かれている通路をまっすぐ進み、ジュースとお菓子のウェンディング・マシンの脇にあるドアをさらに進む。壁には英語の文字で書かれたカラフルな貼り紙や、過去の生徒たちの写真が飾られていた。授業が始まる前の時間帯、廊下の随所にニューヨークランド国籍ではない外国人が大勢いて、気さくな奴が僕に手を上げてハローだのハイだの笑顔で挨拶をしてくる。僕はそれに適当に応じながら、狭い廊下の右側、壁が全面ガラスで外の景色が一望できる側をのんびり歩きながら眺めた。外には小さな中庭がしつらえてあって、屋外レストランのようなテーブルといくつかの椅子が並べられており、その一角で五人程度の男女が談笑しながら朝食のパンやサンドイッチを食べている。今日は天気も機嫌がよく、数日前に記録的な高気圧をはじき出した空には雲一つなかった。

角で知り合いの中国人の女友達を見かけて挨拶をし、「調子はどうだい？」と少しだけ立ち話をした。すぐに用事を思い出して彼女と別れ、さらに行った先の教室のドアをノックした。一拍置いてから室内から返事が聞こえ、授業までの時間を気にしながら静かにドアを開けた。

「どうせグレッグ先生でしょ、俺のことを呼んだのは。御用の向きは？」

思ったより気の抜けた声になってしまったが、相手が相手なのでまあ気にしないことにした。扉を閉める時に静電気がきたのでドアノブから反射的に指を離し、一瞬後ろを振り返ってから再びグレッグ先生の方へ向いた。先生はホワイトボードをぐるりと囲む形でUの字に並べられた机の、窓際中央の席に座って何か、生徒名簿のようなものに手をつけていた。

僕が彼をグレッグ先生と呼ぶのに深い意味はないのだが、何故苗字で呼ばないのか、それはどうも説明し難い。普通にエリス先生と呼べばいいものを、親しみを込めているのかいないのか名前を選ぶし、態度も実に慇懃無礼、かといって僕は彼に申し訳ないとも思っていない。レックスと同じように、年上の気の知れた友人という感じだ

った。

グレッグ先生は後退しかけている前髪を指先で払って顔を上げ、僕を見るとともかわいく笑った。僕とほとんど年の変わらない息子を持つているおじさんには見えない。

「やあ、アラン。授業前なのに悪いね」

「別にいいよ。その授業前に来たのは俺の方だし。サボりたかったしさ」

「おいおい、エイドリアン先生にチクるぞ？　そういう横着を続けていると」

知ったこっちゃないって、せんせーが時間をとらせたって上手く丸めてくれれば、と苦笑して僕は彼の隣の机に座った。椅子ではなく、机に。真っ白なそれは大きくて真新しく、パイプ椅子もクッション付きで学生向けにしては格調高い代物。部屋も絨毯敷きで、扉の向かい側の壁はガラス張りだ。鴨の親子が闊歩する芝生の庭と学校の裏手の家々と蒼天が見渡せる、いかにも外国の教室ですと言わんばかりだが、先生が着ているスノーウィー・ピークのセーターと部屋の隅に置いてある埃をかぶったテープ・レコーダーだけが古めかしい雰囲気醸し出して、何だかミスマッチだった。

グレッグ先生は書類を綺麗にファイリングすると、強いウエリントン訛りの英語ですらすらと喋り始めた。

「前に、僕に進路のことについて相談しに来たよね、アラン」

そういえばそんなこともあった。僕は曖昧に頷いた。三、四ヶ月ほど前のことだろうか、わざわざ先生の部屋にまで押しかけ、ニュージーランドで就職するか日本に帰るかどうか、第三者の先生にははっきり分かるわけがない二時間に及ぶ相談をしていた。ほとんど第二の故郷と呼べるこのニュージーランドを離れるのがどうしても惜しい、と。一応相談には乗ってくれたが、焦慮にまかせて一番仲のいいグレッグ先生に突然話を持ちかけたところで、全く関係のない先生が適切な答えをその場で返してくれるはずもなかった。結局、母やニルスと同じように「自分の行きたい道を行けばいい」という

道徳の教科書に載っていきそうな返事一つだった。

その時は、落ち着いてからまあ仕方ないかと諦めることができた。改めてその話を蒸し返され、少し恥ずかしくなった。

「もう忘れてくださいよ。あの時の俺はちよつと焦ってたし、身内ならまだしも先生に相談したって、高校生じゃあるまいしそう簡単に解決できる話じゃなかったんだ。だからもういいって、先生」

「なかなかそういうわけにもいかなかったね。君はこの学校に入学してきた時から英語は上手だったし、今じゃカリキュラム内でマオリ語とスペイン語も勉強してるだろう。それだけ向学心に燃える君が進路の事で迷っていて、まさか僕が放っておくわけがないだろう。一教師として、協力はするつもりだよ」

「ちよつと待ってよ」僕は慌てて否定した。「俺が向学心？ 勘弁してくれよ。勉強なんて真つ平御免だぜ。先生はそうやって俺をいのように評価してくれるけど、この学校に入っただってほとんど勢いと世間の流れにまかせるままの結果だったし、他の言葉を勉強してるのはただの興味本位だよ」

先生は急に高笑いを始めた。僕には何が何だか分からなかった。それでも現在の状況は今の通りだろう、と笑いを堪えながら先生が言う。

「見てごらんよ。君は今どこにいる？ ニュージーランドだ。君が住んでいた北半球の極東、歴史と伝統の国ニッポンとは違う。南半球、農業牧畜が盛んな英語圏、外国にいます。それだけで学生にしては十分偉業だよ。僕だって数年前まで大阪で英語を教えてたんだから、思春期真つ盛りの青少年たちの心情ぐらい十分理解してるつもりだけど」

実に楽しそうに笑うグレッグ先生を見て、僕は机の上でのけぞつてため息をついた。何で一人、こんなにはっちゃけた先生がいるんだろう、この学校は。

それも構わず先生は話を続ける。

「誰だって一度ぐらい、自分の進むべき道を見失うものさ。そうし

てああでもないこうでもないと右顧左眄、すつ転んで傷ついて、結果はどうなるか、迷いに迷って放棄するか自暴自棄になるかのどっちが多い。特に日本にはね。あの国の中にある色んなものが、直接手を下してはいないが、若者にそうさせるよう自然と仕向けているんだ。進路や受験や就職に限らず、たくさん法令や常識と呼ばれている催眠術たちがね。その存在を認識するだけでガクツと落ち込んだ気分になる。そんな日本の現状を僕は見てきたから、君のような生徒を見ていると、どうしても救い出してやりたくなるんだよ。安息日であっても、井戸に人が落ちたら助けてやるだろう？」

僕はキリスト教のことは分らない。

先生は椅子に座る向きを変えて、机の上で膝を抱えている僕の方に身体を向けた。右側の机に頬杖を付く。

「最近の若者は、なんて言うつもりはないけどね。けれどやっぱり、向学心や意欲に欠ける若者は多い。みんな迷うよ。不安定な世の中で、確かな未来が約束されづらい上に、その未来を見出せないとその責はほとんど自分に回ってくるからね。それを最初から大人たちに教えられると、みんな怖気づくよ。そりゃ、諦めたりやる気をなくしたり、自殺したっておかしくない」

「先生、俺だってその一人なんだ。わかってるんじゃないか。もちろん、そういう若い人たちは意欲もくそもないように見えて、本当は幸せな将来を望んでるんだよ」

けど、現実がそうもいかないことをみんな知ってるんだ。いくらヒットを飛ばした歌が、夢は必ず叶うだの自分らしく生きるだの歌つても、幻想で片づけられてしまうんだ。

「だから残酷なんだよ。本当に意志の強い子供たちしか生き残れない。迷い、悩み、苦しみ、それが試練だと分かっているでも脱落者は出てしまう。しかも日本人は国民性上、やたらと人と比べたがる」

やたらと人と比べたがる。

その言葉は、思った以上に、重かった。

「自暴自棄になるんだよ、みんな。そういう人間はニュージーラン

ドにもいる」

先生の目は真剣だった。

表情は微笑んでいるけれど、言葉の一つ一つは強い意志を放っていて、それらが僕の心にはつきりと語りかけてくる。先生はきっと、誰より世間の現状を知っている。

僕は目を伏して、抱えた膝を机から下ろした。

「どうすればいいのか分からないんだ」呟くように先生に話す。「俺は今その迷走の真っ只中だよ。ここで日本かニュージーランドかおそらく選んだ方で俺の将来が変わる。分かれ道なんだ。こういうとき、凄く不安になるし、誰かにすがりたくなる。確固たる道を選ぶまで慎重に確実に進んで行こうとするあまり、失敗する」

「気持ちちは分かるよ」

グレッグ先生は優しく笑って、椅子の上で体制を直した。遠くでチャイムが鳴る。授業が始まってしまった。しかし、このまま話を中途半端に切り上げて教室に戻るつもりはなかった。

先生が急に声のトーンを上げて本題を言う。

「この大学の近くに、カトリックの高校があるだろう」

先生の親指は背後の道を指している。ここを延々と歩いていけば、教会と広い庭と格調高い校舎が目立つ大きな女子校に辿り着く。ニルスも日本に留学したあとは、ここで教師をしたいと言っていた。だが実際に訪れたことはないの、存在だけ知ってます、と返事をした。

「聖ヴィラ・マリア高校だっけ」言ってみると大層な名前だ。「そこに何か？」

「話として知っているだろうけど、あそこにあるチャペルの二階には大きな日本語教室がある。学校の選択授業のカリキュラムとして日本語の科目は存在するんだ。一度、教育実習のような感じで見学に行ってみるといい、あそこの日本語の先生とは僕も親しい仲だからね。外国で自分の国の言葉を教えるというものは、結構快感だよ」

「ねえ、先生」僕は彼が言い終わる前に反論した。「俺に日本語教

師をやれと？ 確かに教育課程はとってるけど、それは日本に帰った時に何か利用できるかと思って専攻してるだけで、別にこっちで日本語を教えるつもりは最初からないよ。それに、その学校で教師をやりたいと言ってるのはニルスだ。俺の隣人、知ってるでしょう」

「ああ、ニルスは優秀だ。語学教師になるために留学するなんて造作ないだろうね。だけど、他人と比較するのはさらに自分の道を塞ぐ結果になる。それだけはやめなさい」

他人と比べるな。まさに道德のテキストそのまんま。ズクンと心が痛む。

僕は突っ込みを入れたかったが先生がその隙を許さなかった。

「僕はただ、君に道を呈示したただけだ。それを選ぶか捨てるかは君次第。強制してるわけじゃないからね。だけど別に問題はなはずだ、この大学で教職課程をとっているなら。その気になれば卒業後すぐに教えられる。今、あの高校で日本語を教えているのは日本に在住経験のある女性の先生だけど、やはりニュージールランド人だからね。君が会って話せば分かる通り、日本人ではないのだからどうしても発音や文法にズレがある。要するに、ニルスではなくて、ネイティヴの日本語講師を必要としているのだよ」

——自分が世間から必要とされている快感はどうだい、アラン。

「迷うのはごく自然なことだ。だけど、迷いすぎると可能はずの道まで自分で殺してしまう。自分で気づくことが大事だ。そうやって未来を掴み取るのが人間の試練であり、通過しなければならぬ。関門でもあるわけだ。子供たちは迷いすぎている。迷っても確固たる意志を崩さない強い精神力を持った子供が減っているんだね。自分の本心を見失いそうになっても、人はすぐ己に嘘をつく。真実なんて本当はすぐ背後に立っていて、振り向いてくれるのを待っているのにな」

グレッジ先生は立ち上がり、早く授業に戻りなさい、と僕の後頭部をひっぱたいて机から降りるよう促した。僕は脱いでいたスニーカーを履き、先生と一緒に教室を出た。彼が鍵を閉める所作を見なが

ら何度も言おうとしては飲み込み、ようやく呟くように「グレッグ先生」と呼んだ。

「そこまで俺にする理由は？俺はただの留学生で、怠け者の面倒臭がりなのに。いくら教師の義務だとしても、俺みたいな奴は諦めと思う。実際、中高時代の教師はみんなそんな人たちばかりだったしさ」

「その先生たちを僕は疑うね。君がそんな性格だからここまでするんだよ。分からないのか、義理と人情の関西出身で」

先生は鍵の先端で僕の額を小突いた。グレッグ先生は僕を同じ高さの目線から見つめて苦笑している。

首をかしげて、先にすたこら歩いていく先生の後ろを追いかけた。せんせー、教室までついてきてよ、エイドリアン先生に言い訳するために、と甘えると彼は肩をすくめて笑いかけた。何だかその所作と雰囲気故郷の父親の姿に似ていて、英語学校の廊下を二人で歩きながら一瞬の安堵感に酔っていた。

女子校で日本語教師。そんなこと、考えもしなかった。

若干二十一歳で、とつくに大人で、酒も飲めるし車も運転できる。坂本龍一とデヴィルスティックをこよなく溺愛し、勉強と煙草と努力を金輪際嫌悪す。英語以外の教科はことごとくアウト、飽きやすく面倒だと分かったら絶対しない。週末は必ずキャシードラル・スクエアに赴き、ニユージークランドの大自然と国柄と人の心の温かさ何よりの感銘を受けている。愛国心は強い方ではないが、母国の素朴な美しさはよく知っている。このクライストチャーチで暮らし、日本のことを子供たちに教える仕事も――やる分には悪くないのではないのかと思う。趣味も物への執着もないから、就職において給与はあまり気にしない。

楽な方へと物事を運び続ける。

僕は結局、優柔不断のどうしようもない物臭人間で、周囲に気を回

すどころか自分のことすら微塵も分らない、存在理由の欠けた男なんだ。何も無いところからポツと出てきた、無機質で歯がゆい、人の形をしたプラスチックのような僕。

穏やかな国ニユージーランドで暮らしてみても、何か自分に対する見解も変わるだろうかと期待していたが、そうなるように自分で仕向けたら努力しない限り現状打破には繋がらない。待っていたって何も変わらない、そんな単純なことが迷妄に隠れて分からなかった。結局自己の自覚で全てが成立するのだ。勝手に物事が進んでいく現実などどこにもない。何も努力しないで救われることなど、金輪際、絶対にありえない。

何かが変わるはずもない。崩れていくだけ。人任せに生きていける世の中ではなく、しかし自力で切り開ける道は数少ない、そんな悲惨な社会になりつつある。僕はその負け組だ。大いに自分で自分の道を塞いでいる。

舞い込んできた教師の仕事。全く興味はないし考えたこともなかったが、教員免許を取る以上は大いに活用してもまあ問題はないかもしれない。だけど僕は人と関わるのが基本的に苦手で、本当に信頼できると確信した相手にしか心のうちを話さない。生徒との交流などできれば避けたいが、他に道がないのだから仕方がない——というのは悲しい話なのだろうか。

僕には分らない。たった一つの何かのために必死になり、努力し実現させようとする意志の強さというものが。僕は踊らされ続け、誰かの何者かになりたという望みもない。

しかし、教師の仕事について意識したその時から、ミクロ単位のはんの僅かではあるが、モノクロの世界が色づいて見えたような気がした。

8 自己嫌悪

のたくさとしていっているうちに一週間が過ぎた。アリシアには結局、あれから連絡をとっていない。この数日に色んなことを一度に考えすぎたせいか、鈍痛が頭を締めつけ続け、講義のない時間は大学の裏手をほつつき歩いては芝生に転がりばへつとしている日々が続いた。僕は考えることが苦手だ。頭がいっぱいになってメモリー・オーヴアー、脳が拒絶を起こしてしまう。それは言い訳にはならないが、結局考えても考えても僕の頭のレベルじゃ答えなんて見つからないだろうという諦めが最初からあったからなのだ、きっと。

土曜日の午後、特に曇ることもなくぎらぎらと照りつけ元気に職務をこなす太陽の下、寮の裏にある芝生のグラウンドに佇む一本の柳の木の下で、草の匂いを嗅ぎながら横になりばへつとしていた。オゾンホールを通してダイレクトに降り注ぐ紫外線を感じながら、日焼け止めは塗ってきたが出来れば春焼けはしたくない、とうつ伏せになりもぞもぞと匍匐前進して柳の陰に隠れた。日差しを直接浴びてドロドロの汗まみれになるのは皮膚ガンより嫌だ。

持ってきたペイパーバックも読まず、というか電子英和辞書を忘れたので読む気にならず、かといってそれを取りに寮に戻る気にも到底ならず、結果的にぼへつとすることを選んだ。うつ伏せで寝ていると顔に直接芝生の草が当たり、ちくちくと少し痛いのが気持ちいい程度で済んでいる。それらは若干湿っていて、穏やかな草の匂いに混じって土の匂いがする。木漏れ日が僕の背中と芝生をじりじりと焼く、それにも匂いを感じることが出来た。小鳥のさえずり、時折吹く優しい風、柳の葉が擦れる音、いい天気。ああ、もう永久にこうしていたい。こうやって草の匂いを嗅ぎながら眠っていたい。僕は大の字でコンニャクのように寝そべり、しばらく昼寝しようと本気で思った。

しかしそれを非情にも遮ったのは、硬式テニス用に似たサイズと硬

さのボールで、ひゅつと空気を切る音と同時に、顔を伏していた僕の後頭部を直撃した。強烈な痛みが走り、僕は思わず飛び上がった。頭を両手で抱えて呻き、歯を強く噛み締め周囲を見渡すと、二つの野球用グラブを持ったニルスがすぐ背後に立っていた。太陽で逆光になっていて、身長がでかいこともあって見ようによつてはかなり恐ろしい。背後の太陽光で彼のピアスがきらりと光った。

「どこをほこほこ歩いているのかと思えば、こんなところで何マグ口になつてゐるんだよ、若いもんが。見てるだけで暑苦しい」

「だったら見んな。その上にボールぶつけんな」僕は芝生に座つて涙目になりながら文句を言った。僕の傍らに転がる野球ボールは直撃だったせいでかなり痛かった。

激痛に頭を抱えて座り込んだままの僕と目線を合わせるためにニルスもしゃがみ、子犬を扱うように僕の額を人差し指で何度も小突いた。訳の分らないことを喚きながらそれを拒絶していると、彼は野球ボールを拾つてグラブを右手にはめた。彼はサウスポーだ。左手に握ったボールをスライダーの形に握つてそれをグラブに押し付ける。

「ぼへつとしてゐるぐらいなら、ちよつとは身体動かせよ。キャッチボールやらないか、すぐそのグラウンドで」

「日に焼けるし、汗かくから嫌だ」

「横着者が。白アスパラ」ニルスはそう言うと言地でも地面にうつ伏せでへばりつこうとする僕の両足首を持つてずると日向へ引きずつていった。勘弁してくれ、もう。全く起き上がらず地面に伏せたまましていると、足を開放された代わりに背中にグローブが落ちてきた。

そもそも国技でもなんでもない、むしろ知らない人間の方がいいかも知れないベースボールを何故純然たるニュージランダーのニルスが知っているのか——もちろん、僕が教えた。盗塁や犠牲フライ、バントその他ややこしいルールは省いて、とにかく「打ったら走る」「ボールが飛んで来たら投げる」「一周走ったら得点」と三角ベ-

スのようなルールを寮生の友達に簡単に説明すると、一大ベースボール旋風が巻き起こりこぞってグラブを手にする学生が増えた。ラグビーやサッカーのように、いつ見せ場があるか分からない延々と続くスポーツと違い、各回にチャンスがある野球の面白みがどうやら快感に思えたらしい。ぜひともみんなを日本に連れて行って生のプロ野球の試合を見せてやりたいものだ。

僕は渋々グラブを左手にはめ、右手に押し付けて感触を確かめた。元野球部ではないが体育の授業でやったことはある。カーブを投げるのにどれだけ練習したことか、鑑みてもおぞましい。ニルスから放り投げられたボールを受け止めると、ブランクが空いているからか、手の骨が微かに痛かった。ボールとグラブがぶつかり合う心地よい音が、真昼のグラウンドに高く響いた。

どれだけ鈍っているか、確かめるために僕は両腕を高々と振りかぶり、フォームを決めて左足に全体重をかける。プロっぽく上半身のみならず足の勢いも利用して、ニルスの顔面めがけてボールを投げる。完璧なストレート。若干高めに責めてきた投球を顔の正面で受け止めたニルスは、口笛を鳴らし、さすがは日本人、と意味の分からない褒め言葉を並べた。

「日本が誇つていいスポーツはフィギュアスケートと野球だな」僕はしゃがみこみ、キャッチャーの体制を取ると、カーブ、と笑ってニルスに指示した。彼はほんの少し口角を上げて笑い、日本のプロ野球選手を真似て膝を腹の高さまで上げ、若干サイドスロー気味に投げた。全然カーブじゃない。外角高めの場所でキャッチし「これは絶対ボールだろ」と苦笑した。それに対し「お前は身長が低いからストライクゾーンも小さいんだよ」と言い訳を垂れるニルス。僕はグラブからボールをとり、それをニルスに向かって軽く投げた。大きな放物線を描いてニュージールランドの乾燥した空気を切つて飛んでゆくボールは、自由で、軽快で、羨ましかった。太陽と重なり、逆光で黒い球体に見える。まるで皆既月食のようなそれを、僕は目で追った。

そうして僕らは何度か無言でボールを投げ合っていたが、ふいにニルスが口を開いた。

「こないだ、グレッグ先生と何を話していたんだ？　呼び出されたんだろう」

腰に手を当てて、首を少し傾げていて、無理に詮索しようとする表情ではなかった。こちらから見ると少し逆光になる。右手でボールをグラブに押し付けながら、ニルスと同じように首をかしげる。僕は両手を腰にあて、言うべきか戸惑った。

「えっと、進路のこととか」視線をニルスから外して小さな声で答えた。

「戻るか残るか、っていうあの話か」

「そうそう。やっぱりまだ迷ってるからさ」

一瞬はニルスに話すべきか選択に苦しんだものの、やはり口に出すとすらすらと言葉が出てくる。それだけニルスを心の底で信頼しているのだろう、僕は。

ニルスはグラブを持った手をふらふらさせて「ふーん」とだけ答えた。そのため息混じりの返事を聞いて、何か気の利いた答えを返してくれるだろうと勝手に期待していた愚かな自分に気づく。

「ふーんて何」

「相変わらず優柔不断だなんて」

「お前にわざわざ改めて指摘されるまでもないっての」

なんとなく腹が立ったので、思いつき振りかぶってボールを直球で投げつけた。顔面でそれをキャッチしたニルスは、頭へのデッドボールは退場だぞ、とどこで仕入れた情報なのか文句を言い笑う。しかしその笑顔もどこかしら覇気がなくて、溜息と共にゆっくりと消えていった。

「アリシアは？」

しばしの沈黙の後、突然、封印していた名前が空気を伝ってくる。鼓膜をくすぐるその言葉。

多種多様の気持ちや言葉が一斉にせりあがってくるのをせき止め、

何とかして他に話題を振ろうとした。が、溜まりに溜まった言葉の嵐は、逃げ場所を求め必死であちこちを駆け巡り暴れる。

「……まだ、謝ってない」

時間が経つほど苦しくなる。この気持ちは果たして罪悪感なのか、ただの自責なのか、投げやりでいるのか、分からない。分かっただけに辛くなる。

ニルスはしばらく、怒っているのか哀れんでいるのか分からない辛辣な表情で僕を睨み、ふうつとため息をついて肩を落とした。

「そうか」

「うん、そう」

「そんなふうにして逃げちゃいけないか、自分自身に」

ビリッと体内を光速で駆け巡る電流。慌てて顔をあげると、これまで見たことがない鋭い眼差しでニルスがこちらを睨みつけていた。彼の左手の指の間で野球ボールが踊る。時間が経ち、日が傾いてきているのか、彼の逆光がさらに濃くなり顔の中央が暗くて見えづらい。

僕は一瞬、声をあげて引き下がりそうになった。自分の一番薄い皮膚を切り裂かれた時の痛み。

「そんなわけがない！」僕は叫んだ。「俺は自分を責めてばかりだ。責めるのも嫌だし、こんな気持ちになるくらいだったら死んだ方がマシだっと思うくらいだよ」

「いつまで悲劇の主人公ぶってんだ、馬鹿」

ニルスがぴしゃりと言い返す。僕は肩を震わせた。彼はこめかみを人差し指と親指で押さえている。

「いや、物語の主人公だったらまだいい方だ。そういうのは脚本家の手によって、自分と向き合いながら苦しい思いをしていつかどん底から這い上がってくるように書かれるからな。もういい加減に本音を言う。お前は己から逃げた後ろめたさを、自分を責めることで正当化して、同情を買ってるだけだ」

生ぬるい風が僕らの間を吹きぬけていった。

何を言っている？ 俺が、自分を正当化してる？ 同情？

右足を引き下げると、芝生とこすれあつて形容しがたい音が鳴る。風が髪を乱したがそれを氣遣う余裕なんてなかった。心臓が跳ね続ける。

確かに僕は自分を責めた。周りにいる友人たちと違い、何もできない自分を。ハンディキャップを持ちながらも希望あふれるアリシアと比べ、自分を貶めた。優柔不断で、これといった長所もなくて、だらけてる自分の性格が嫌いで。責めるだけ焦って、けれど責めることをやめられなくて、そんな自分も嫌いで仕方ないというのに。激しい劣等感にさいなまれ、そう、あたかも……自分が世界で最も不幸な男であるかのように。

片目から涙が零れ、頬を伝っていくのが分かった。

「前から何となく気づいていたよ。本当は自分じゃなくて、アリシアを責めただけだろ？ 被害者ぶって、罪悪感を拭いて。すぐえ悪い言い方をすると、お前は自分を卑下して他人から優越感を得たいんじゃないの。それで苦しくなくなるわけでも、お前の格が上がるわけでもないのにさ。お前はただアリシアを責める口実を作りたいだけだから、甘え続ける。単にアリシアが疎ましいだけだ。違うか？ 空しくないか？」

僕は最後まで聞かずに俯いた。

背中に貼り付いていた真っ黒なもう一人の「僕」が、涙で目を真っ赤に腫らして、僕の前に立っていた。

9 なみだ

随分久しぶりに来るキャシードラル・スクエア。どうして僕は、すぐる場所を求めてここに来るのだろう。人間はどうして何かに縋るのだろう。この世には縋るものが何もないと知っているからなのだろうか。

僕はもう、神を振り返らないと決めたはずなのに。罪を許されなければ、僕らの魂は枯渇してしまう。

夕刻近く、街灯に明かりがともされ町がライトアップされる。美しい、人工の光。人は月や太陽の恩恵を忘れかけているけれど、プロメテウスのはらわたの代わりにこんなにも美しいものを生み出した。あのあと、ニルスに顔を殴られ、そして子供をあやすように優しく頭を叩かれた。何も言わずに寮に戻るニルスを無言で見送り、柳の木の下でみつともなく泣き崩れた。誰にも見つかることなくひときり泣いて、夕方になるまでそこに座っていた。

僕は、結局、自分が大事なだけだったんだ。

何度も何度も首を振った。考えるたびに泣きだしそうになった。余計に自分が嫌いになりそうだった。

でも、そうやって色んなマイナスの感情を抱え込んでいる自分が大好きだと思っているのかも知れない。僕が口に出して悔しさを相手に伝えることは、ただ同情されて、他人を利用して悲劇の主人公になって、罪悪感を押し殺して、気休めの安心感を得たいだけで。

ぼろっ、と涙がこぼれた。キャシードラルの光が霞む。今日はレックスが店を出していなくてよかった。僕は涙を拭いながらとぼとぼと歩き、キャシードラル前の広い階段に腰をおろした。夕方になってもさほど寒くなく、春が近いことを風が知らせる。しかし、シーズンズから伝わる石段のひんやりした冷たさはまだ健在だ。キャスケットを深くかぶり、ウィンドブレーカーの前を強く握った。腕時計を見るともう六時近い。これから町が活気を徐々に失っていく。薄

暗い夕暮れ空を黄金に照らす街明かりを、階段の上からぼんやりと見ていた。

クライストチャーチは、美しい。小さな中心街を離れると緑溢れる市街地が広がっているの、日本人の感覚では田舎に見えてしまう。しかし、ニュージーランドはこれが普通だ。少ない建物とたくさん公園や芝生、木々、噴水、川、フリーマーケット、パントにトラム、群がる野鳥、どこまでも広い空。故郷神戸は比較的緑の多い場所だと思っていたが、ニュージーランドの感覚ではあそこもコンクリートジャングルになってしまう。

ここに来て良かった。こんな状況でも素直にそう思える。そつと目を伏せて、胸一杯に空気を吸い込んだ。僕が何のためにニュージーランドに来たのか、それはまだ分からないし、これからもひよつとしたら分からないままかも知れないけど、すべては結果が証明してくれる。僕がこれからどう生きるかに答えがある。

日が沈み、空が黒いセロファンをゆつくりと何枚も重ねていく。街明かりに輝くクライストチャーチ。僕はそうやってしばらく、この宝石の集合体を見つめていた。己を呪いながら。きつとここにいてはいけないのだと思いながら。

次にアリシアに会った時、なんて言えばいいんだろう。

一週間前、僕は彼女をひどく傷つけた。せり上がってくる感情の暴走を止められず、滝のように思いつく限りの罵声を浴びせた。思い出すことも辛い。人はきつと言うだろう、君は女を泣かせる非情な男だ、と。

どうすればいいんだろう（ホワット・シュッド・アイ・ドウ）。

僕は何をしているのだろう（ホワット・ハヴ・アイ・ビーン・ドゥーイング）。

観光客や家族連れが目の前を通り過ぎる中、僕は目を伏せたまま、立てた両膝に顔を埋めた。僕のすぐ隣を、キャシードラルに入って行く人たちが通り過ぎる足音が近づいては去っていく。出て行く人の足音は少なかった。

僕はもう泣くことも出来なかった。泣けばそれこそ同情誘いだと思われるてしまいそうで、自分を律したつもりでいた。

たった一人で、僕は僕を苦しめ続けたいといけなのだろうか。

僕が本当に望んでいたことは。

すぐ後ろで、真っ黒な僕が立って僕を見下している気がした。冷たく、寂しい空気。相手にしたくなくて、僕は目をぎゅっと瞑って呟いた。ほっといてくれよ、もう。

「誰をほっといてくれって？」

正面から声がした。聞き慣れた、あどけない少女の、歌うような声。香水の香り。

僕ははっと顔を上げ、目の前に立つ彼女を見上げた。アリシアは僕の座っている階段の二段下に立って、膝に手をつけてこちらを覗き込んでいる。ポニーテールの先とネックレスだけが重力に従って垂直に垂れている。群青色の目をまっすぐに向けて、アリシアは不思議で仕方ないといったような表情で首を傾げていた。

僕ははじかれたように立ち上がり、何か言おうとしたが声が出なかった。はずみでキャスケットが落ち、慌てて頭を押さえたが遅かった。アリシアは階段を転がっていきそうになった僕のキャスケットをしゃがんで拾い、ぱんぱんと手で叩いたあと、それを僕の前に差し出した。

彼女は、笑っていた。その美しい笑顔が、僕を貫いていく。

僕は右足を後ろの段まで引きずった。ざつ、と靴底と階段がこすれる音が響く。僕は両目を見開いたまま、硬直して動けないでいた。引き下がろうにも足がそれ以上動かない。何とか必死で首を横に振ろうとしたが、出来なかった。

右足だけ逃げ腰で固まったままの僕を、アリシアは不思議そうな目で見ていた。やめてくれよ、その優しい瞳。

「どうしたの、新夢？ 野獣か何かに遭遇したみたいなの顔しちゃって」

「いや……」

彼女が小首をかしげる様を見て、僕はようやく顔を動かせるようになった。硬直していた首が錆びた蝶番のようにぎこちなく、少しずつ頭を支える力を失って俯いていく。自分の靴紐が見えるほど俯いて、しばらく顔をあげられずにいた。アリシアは何も言わなかった。下を向いていると、涙がこぼれてきそうだった。そんなこと、アリシアは絶対に許してくれるはずなのに。

長いことそうしていたあと、僕はその場に崩れ落ちるようにとざりと腰を落とした。アリシアは驚いて「大丈夫!？」としゃがんで僕の肩を掴んだ。それでも彼女の顔を見たくない。僕の顔を見られたくない。

僕は、泣く権利を持つ人間じゃない。

僕の代わりに、君のことをずっと傷つけてきたから。

「どうしたの？ さっきから何か様子がおかしいけど。気分悪いの？ 隠さなくてもいいから、ちゃんと行って」

俯いたまま、僕の肩を軽く揺する彼女の言葉をずっと聞いていた。どうしてこんなに優しくしてくれるんだろう。僕はこんな人間だというのに。

僕がこの二年間ずっとそうしてきたことに、アリシアが気づいていないはずがないのに。喉をかきむしりたかった。きつと僕が自殺すれば、アリシアは泣いてくれるだろう。こんな僕にも笑いかけてくれる、優しい女の子だから。だから僕は死ねない。

僕が本当に求めていたことは、アリシアへの償いでも、自分への罰でもない。それが分からなかったから、こんな姑息で遠まわりなやりかたを続けてしまったんだ。僕の馬鹿。

「新夢。ねえ、新夢！」

アリシアがことさら強く僕の肩を揺さぶったので、僕はゆっくりと顔をあげた。僕が今ここで泣いても、彼女が怒らないことを願いながら。

君は、こんな僕のことを愛してくれるだろうか。

アリシアの表情が強張る。きつと僕は、泣きだしそうな表情のまま

顔を歪めて彼女を見ているんだろう。僕ら二人は階段にしゃがみこんだままそうして見つめていた。いつ泣けばいいんだろう。これまでもずっと彼女に甘えてきたけれど、限界まで絞り出すとしたらどこまで感情を吐きだせばいいんだろう。

アリシアはしばらくして、ふんわりと笑った。スフレのように柔らかく優しい、混じりつけのない笑顔だった。一瞬だけ、彼女がヨローロッパの名画に出てくるような女神に見えた。

優しく笑う彼女を見て身体から力が抜け、奥歯が震えた。じんわりと鼻の頭が熱くなり、視界が滲む。その前にアリシアが颯爽と立ち上がり、僕の腕を強引に引っ張って立たせた。不安定な階段の上でふらつく僕の手をつかんだまま、キャシードラル・スクエアを横切って大股で歩き始めた。

「ちよつと、アリシア!？」

「待って。泣くのはちよつとタンマ。今は許さない、我慢して。人前だし」

ぐいぐい引っ張る彼女の力は強くて、僕は何度か転びそうになりながら彼女のあとについていった。彼女の左手にはまだ僕のキャスケットが握られている。

近くの立体駐車場に入り、アリシアの車の助手席に放り込まれる。薄暗い駐車場には誰もいなくて、日本車ばかりが静かに並んでいる。アリシアは勢いよくドアを閉めて運転席に乗り込み、僕のキャスケットを後部座席にフリスビーのように投げ入れた。

泣きそうだったこともすっかり忘れて反論しようとする僕の頭を、いきなり小さな手で掴んでがしがき回すアリシア。彼女は先刻と同様、大人の女性の優しい笑みを浮かべていた。茫然と口を開けたままの僕の頭を、髪の流れに沿って優しく撫でる。

聖母マリア。ああ、そうだ。誰もが忘れない母の温かさ。

間抜けな顔をしているだろう僕を見つめていたアリシアが、ぐしゃぐしゃになった僕の髪をそつと梳かしながら、もう片手で頬に手を伸ばした。

「はい、もう泣いていいよ」と、言われても。

キャシードラル・スクエアを引つ張り連れられて車の中に蹴り込まれて、それでさあ泣けと言われてももう驚きで涙も引つ込んでしまった。

ぽかんと開いたままの口をなんとか閉じて、また開く。忘れるな、まず先にやるべきことがある。

「アリシア、俺……君に謝らなきゃいけない」

ぐつと唾を飲み込み、意を決した。心臓がティンパニのようだった。アリシアは小さく首を傾げ、僕の髪を梳く手を止めた。

「謝る？ 何かされたっけ。あ、こないだのこと？」

「うん。それもある」

言いながら、また顔が俯いていく。

——僕は誰を弁護したいんだ？

何を言ってもエゴになってしまいそうで怖い。それぐらい、この二年間で自分が積み重ねてきた罪は重かった。

自分でも知らなかった己の罪をダイジェストし、それをさらに白状して他人に謝罪するというのが、ここまで苦しく耐えられない行為だとは考えたことすらなかった。経験もないし、小説でもあまり読んだことがない。

一体僕はどこからどうすればいいんだろう。

誰もいない立体駐車場の、整然と並ぶ日本車の一台。その中に、今、僕とアリシアが二人でいる。誰も僕の声を聞いちゃいない。

一瞬、キャシードラルの光が脳裏をよぎった。

何者も侵せない、誰も救わない、神々しい光。僕を侵す、粒状の光。ああ、だからもう、僕はここにいないんだ。きっと、これ以上は背中を向けることが出来ないんだ。

僕はぐつと両の拳を握ったあと、助手席の上で上半身だけアリシアに向き合い、緊張のあまり回らない舌で話し始めた。

「言ったよね。俺は君の足を奪ったも同然だって」

英語を間違えちゃいないかと余計なことに不安になる。アリシアはまだ僕を見ている。

「言ったね。一週間ほど前に」

「ごめん。もう謝ることしか出来ない。他に俺はどうすればいいのかわからなかったんだ。いや、今でもわからない。君を傷つけてまで手に入れたかったものが、わからないんだ。きっと、ひどくつまらないものだろう。君にひどいことを言ったのは事実だ。これが俺のエゴだとすれば、結局はすべての行動がエゴとしてあったわけだし、今になってようやく自覚したけど、もう遅すぎるような気がする……」

そのあとは上手く言葉にならなかった。語尾は気持ち悪く濁って、細い管を流れる泥水のようになってしまった。

僕は歯を食いしばり、必死で涙が溢れそうになるのをこらえた。アリシアは泣けと言ったのに、泣きたくない。きっと彼女は気付いていたんだ。僕が泣きたくなるこれまでの理由と、今の理由。僕がさつき気づいたばかりの理由を、ずっと前から。

駐車場を出ていく車が僕らのいる車の前を通り過ぎていく。その音が過ぎ去ったあと、アリシアは軽くため息をついた。あ、呆れられたかな。そう絶望した時、再び頭に彼女の小さな手が乗せられた。子供をあやすように撫でられる。僕は涙でうつすら滲んだ目をまっすぐ向け、アリシアを見た。彼女はやはり、優しく笑っていた。僕はぐっと眉をひそめた。

「たった一歳の差で子供扱いするなって、前から言ってるのに」

「ごめんね。でも、今の新夢は子供みたいだよ。しかも思春期の子供」アリシアは僕の頭をぼんぼん叩きながら鈴のように笑う。「そして、とてもとてもきれいな心の子供」

違う、と否定したかった。違う違う違う！俺は君が言うほどきれいじゃない。ここまでどす黒く卑怯なやり方をもつてまでしないと自分の存在価値が分からないような人間を、どうか持ち上げないでくれ。

アリシアは目を細めて笑い、僕の頭から手はずし、正面に座りなおして足を組んだ。

「この言い方、あちこちで言われてるから知ってるだろうけど。人間には二通りの種類がある、っていうやつ。私はね、自分を知っている奴と知らない奴の二種類だと思ってる。本当に馬鹿なのは後者どれだけ地位があるうと名誉があるうと、空からばらまくほど金があるうと、自分を知らない人間は史上最強の大馬鹿者^{アスホール}だわ。でも、そういう人が以外と多いの」

すごい言葉を平気で使う。僕は冷や汗をかきながら彼女の言葉を聞いていた。

「あなたは私と知り合ってすぐの頃は、進路どうしようってよくばやいてたけど、そのあとはほとんど言わなくなったから、自分なりに吹っ切れたのかなって思ってた。でも違うらしいわね。こないだ、私の家で爆発したあなたは、泣いていた。悔しくて、自分でも分かんなくて、分からない感情の矛先が私に向いたっていうだけなんだろうなって分かった。そこで気づいたわ、私のことで苦しんでるんだって。将来の不安とか自分の無気力さへの恐怖とか、ニルスにはよく話してるらしいのにどうして私の前で明るく振る舞えるんだろう、私には何ができるんだろうって、いつも心配だったわ」

向かいの車が発進し、大きく曲がって僕らの前を通り過ぎていく。その大きな金属の塊が去る前に、アリシアは突然運転席から身を乗り出し、僕の左頬を張った。バシッ、と思いのほか高い音が鳴って、一瞬目の前がオレンジに染まった。刺すような痛みのもと、じんわり伝わる熱。僕は顔が反った方をしばらく向いていたが、やがてゆっくりと顔をあげた。アリシアはとても、これ以上ないほどとても悲しそうな目で、僕を叩いた手を握りしめていた。

言ってくれば良かったのに、と彼女が呟く。そして僕は後悔した。アリシアも苦しかったんだ、と。泣くことが罪だと思って、きつと、僕よりも。

アリシア、と名前を呼ぼうとして口を開くが、声が出なかった。じ

くじくと痛み始めた頬に手を添えて、眉を顰めた。

多分今は、何も言っではいけない。

話し始めたのは彼女からだった。

「自分の醜いところを知らない奴は大馬鹿者よ」僕を叩いた手をゆつくりとひらく。「自分がどれだけ馬鹿か、どれだけ愚かか、どれだけ血生臭いか、それを知っている人、自分で気づけた人はいくら馬鹿でも尊いわ。知らずに自惚れて飄々と生きてる人間より、ずつとね。あなたはとても優しく、とてもきれいな心を持つてる。余計な言葉はいらない」

そして、花のように彼女は笑った。

「新夢。あなたを、許します」

——罪滅ぼしをしたいと願うことすら、もはや叶わないことかと思っていた。

ずっと僕は、この言葉だけが欲しかったのかも知れない。無意識に震える歯を食いしばり、ぎゅっと目をつぶったが、遅かった。転がるように落ちる涙。目の奥と鼻の先がツンと痛む。

俯いてみつともなく泣きじゃくる僕を、アリシアは運転席から身を乗り出して抱きしめた。女の子の胸で泣くなんて、かつこ悪い。とつくに僕は大人なのに。だけど、今は止められなかった。声を必死で堪えながらぼろぼろと泣く僕を、笑わずに抱きしめてくれる、それだけでアリシアの優しさに感謝の気持ちでいっぱいだった。

「ごめんなさい。私こそ、新夢が苦しんでるってこと分かっていながら、何か言うことで余計に傷つけるんじゃないかって怖くて、何も出来なかった。お互い、膠着状態だったのね」

否定するためにかぶりをふると、涙が飛び散った。

「どっちも素直になれなかっただけ。だから仲直りしましょう」

僕の目からダイレクトに落ちた涙はアリシアのジーンズに染み、どんどん紺色の斑点を広げていく。

どうしよう。俺、すっげえかつこ悪い。

許してもらったことを一番拒みながら、ただ許してもらったことを求めている。責めるでもなく、否定するでもなく、いっそ天罰が下った方が楽だと思ったが、どうやら僕はどこまでも嘘つきらしい。

10 きみを好きでいてもいいですか

「ご飯食べていくでしょ。適当に座っててちょうだい」

泣きやみ、黙って助手席に沈んで感傷に浸っていただけなのに、いつの間にかアリシアの家まで連行された。彼女は帰るなり春物のジャケットを潔く脱ぎ、キッチンでフライパンを振り回して料理を始めた。

僕はアリシアから返してもらったキヤスケツトを片手に、リヴィングで茫然と立ち尽くしてキッチンにいる彼女の後ろ姿を見ていた。結局、彼女は何もとがめなかった。

僕がしてきたことを一切責めないで、ただ許してくれた。それが一番の救いだったのかも知れない。

「手伝うよ」僕はキヤスケツトをダイニングテーブルの上に放り投げて、半端に置かれたままのアサリに手をつけた。「どうせやることないし」

「そう？　じゃあ、それを砂抜きして洗ってから、野菜を小さめに切つて。包丁で指を切り落としちゃ駄目よ」

「そんなことしないよ、今更」

「さあ、どうかしら」

手伝いを拒まれなかったのが嬉しかった。アリシアはとびきりきれいに笑い、君はどう思う？　なんてニンジンと会話している。そのあと、そいつの首元を包丁でぶった切るのだから彼女の思考回路はよく分からない。

僕はシンクでアサリをざくざく洗い、包丁をもう一本出してきてくるりと手の中で一周させたあと、ベーコンを切り始めた。アリシアが「ほらそういうことする」と隣で苦笑する。

小さめに切り分けた野菜たちにながりがりと胡椒を擦りながら、僕はためらいがちに彼女に尋ねた。

「気づいたの？　一週間前」

口をぱっくり開けたアサリを鍋から引つ張り出すことに集中していたアリシアは、数秒経って「大体のことはね」と答えた。そのあと、手早く貝殻から身を取っていく。

「ああ、たぶん私のせいなんだなー、ってすぐに分かったわ。だから余計にしんどかった。罪悪感でいっぱいだった」

それはもう、僕だって罪悪感で押しつぶされそうだった。

何も語らなかったから、お互いに無言で傷つけ合ってたんだ。

「なんて繊細でかわいらしい男の子かと思ったわ」

「何だよ、それ」僕は喉で小さく笑った。「人をセンシティブで脆弱な日本男児みたいに」

「あら、違うのかしら」

「馬鹿にしてるの？ 君は」

アリシアはくすくす笑って、僕の手元の野菜たちを横からひったくった。口笛を吹きながら鍋でそれらを炒め、アサリの蒸し汁だの牛乳だの色んなものをどかどか放り込んで煮込む。蓋をしてくるりと振り向いたアリシアが、包丁を洗う僕に言い放った。

「別に気にすることでもなかったのかもね」

「おいおい、そう冷たいこと言うなよ」僕は笑って包丁をタオルで拭いた。「仮にもお互い、こんなつまらない虚栄心とか罪悪感で生かされてきたわけだし」

「だって、そもそも、私と新夢は、全然関係ない人間だもの」

ナイフスタンドに包丁をすんと差し込み、僕は鍋の火を少し弱めた。そしてアリシアの顎に右手を添えて引き寄せ、彼女の柔らかい唇にゆっくりとキスをした。一瞬、ぴちゃん、と耳の奥で雫が水面に落ち、波紋が広がった。ただ触れ合うだけの幼い口づけをして、僕たちは互いに笑った。額を合わせると、ざらりと前髪がこすれ合う。

しばらくそうやってただ笑うだけだったが、鍋がぐだぐだになり始めたので慌ててアサリを放り込んで火を止める。器に適当に盛り付

け、ダイニングで二人、向かい合ってクラムチャウダーを食べた。
「簡単でごめんね」と謝るアリシアに、僕は首を振った。

半分ほど食べ終わったところで、アリシアがスプーンを置いて言った。

「決まったよ」

「何が？」

「就職。あの小物細工のお店」

「本当に？」僕は身を乗り出した。「おめでとう、アリシア。僕も嬉しいよ」

「ありがとう。新夢は、もう辛くないんだね」

僕がその言葉の意味をくみ取れずに首をかしげると、アリシアは小さく笑って「また、彼女に比べて俺は、とか思ってたない？」と言った。

「そんなこと」僕は思いつきり笑いながら反論した。「もうないよ。君に一発食らったからね」

自分の頬を指さすと、アリシアは肩をすくめた。

「それは良かった。あなたがそうやって自分に自信持てるようになってくれたら、私も堂々と就職について話せるから安心した」

「気にしないで」

「うん、気にしない。だから新夢も気にしないで」

「頑張りなよ。君は何だって出来るんだ」

そんなことを素直に口に出出来る自分に気づき、ちょっとだけ面白かった。

「ライバル関係すら成り立たなかったんだな、俺たち」

「そうね、一体どういったレベルの虚栄心だったのかしら」

また、鈴が転がるような笑い。食器をシンクに持っていき、アリシアが洗って僕が拭く。水まわりを全部片付けてしまうと、もう深夜近かった。アリシアは淡いグリーンのカーテンを手早く閉め、そのあと暖炉に火を点けようとしたが、途中でやめた。

「今夜は暖かいわね」

うん、と返事を返すと、「遅いから泊まっていっていいでしょう?」と言って彼女は床に放ったままだった僕の上着とキャスケットをコートスタンドに引っ掛けた。泊まらせてもらえるのは素直に嬉しいのだが、なんだか納得がいかない。

「構わないわ。人間一人増えたところで、変化なんかありやしない」「そういう意味じゃなくて……」

「こここのベッド、使うでしょ?」アリシアは僕の言葉を無視して寝室のドアを開けた。「私はソファで寝るから」

予備らしい毛布を抱えて、彼女はそれをソファに放り投げた。ぶわっ、とものすごい風が巻き起こる。これにはさすがに反論せざるを得ない。僕は勢いよく手を振った。

「いいよ、そんな、いくら暖かいつてったって」

「客人はおとなしくもてなされてなさい」

「君は女性なんだから。第一」僕は肩を落としてため息をついた。

「そんなに君から救われてばかりじゃ、僕が君を救う機会を失ってしまう」

言い終わって、そんな自分のセリフがばかしくなって、苦笑してしまった。大仰なことだ、全く。アリシアはしばらく、品定めするような目で僕を見上げていたが、やがて笑って「かっこつけが」と言った。

シャワーを浴びるのは明日にして、僕はさっさと毛布にもぐりこんだ。ソファは弾力性がありすぎて、逆に体の線にちょうどフィットして心地いい。やわらかい毛布を頭までかぶった。「おやすみなさい。いい夢を」という優しい声とともに、部屋の電気が落とされた。一瞬、母親に寝かしつけてもらっていた小さい頃を思い出し、ひどく安心した。

カーペットの上を滑るようなアリシアの裸足の音がしばらく響いたが、やがてそれは少し離れた場所で止まった。虫の声すら聞こえない、夜の静寂。僕はすっぴりかぶっていた毛布から顔を出し、目を閉じたまま「ありがとう」と呟いた。

ほんの数秒の静けさの中で、アリシアがかすかに笑ったのが分かった。

「私こそ、ありがとう。いつまでも、新夢のままでいてね」

寢室のドアが閉まる直前、つぶやくような細かい声で彼女がそう言った。僕はしばらくソファの上でうとうととしていたが、ぎゅっと掴んだ毛布からふんわりといい匂いがして、それはやがて僕を甘く安らかな眠りに誘導した。穏やかな夜だった。

人の部屋で一夜を過ごすのは一体いつぶりだろうか。

生きていれば往々にして、ほぼ全ての生き物に平等に朝は訪れる。

僕はそれがどうしようもなく怖かった頃があった。目覚めることを恐れて眠れず、本を読んだり、音楽を聴いたりしていた。中学生の、精神的に不安定な時期だ。

夏休みの宿題を片付けるという名目で友人の家にたまたま泊まりに行ったことがあり、その時ばかりは何故か、慣れない他人の部屋で、他人の布団で、パジャマ姿の女の子ならまだしも同クラのむさい男と肩を並べて、ぐっすりと深く眠ってしまった。修学旅行などで枕が変わると寝つきが悪くなるという話はよく聞くが、僕の場合は逆だった。むしろ、旅行などに出かけると宿泊先ではよく眠れるほうだった。眠れないのは自宅にいるときだけだ。

ニュージールランドに来てからというものの、寝つきはいい。この国の朝は美しい。目覚まし時計を止めてベッドから這い出し、カーテンを開けると、寮の小さい窓から真っ白で清々しい朝の太陽の光が遠慮会釈なく降り注いでくる。乱暴で、けれど優しく、僕はそれが今でも好きだ。

毎朝、僕は目覚まし時計の音で目を覚ましているのだけれど、今日ばかりはどうしてだか、携帯電話の着信音でゆっくりと、しかし引きずられるように、叩き起こされた。ピリリ、と鳴るだけの単純

な音。けれど、ああいう周波数が高めの音が断続的に繰り返されると、かなり不快だ。

僕は布団の中でもぞもぞと動き、ズボンのポケットに入れっぱなしの携帯電話に手を伸ばした。くぐもって聞こえていた着信音が明瞭になると途端に顔をしかめる。音から逃れるように僕は通話ボタンを押した。

「もしもし？」

「あ、アラン？　もしもしじゃねえよ、寝ぼすけ。今何時だと思ってるんだ？」

電話の相手はニルスだった。眠い目をこすって、必死で会話を聞き取ろうとするが、ただでさえ電話越しなのに英語だから分かりづらい。半分ほど目をこじあけてようやく、ここがアリシアの家なのだということを思い出した。開かれたカーテンから差し込む朝の光が、他人の家の天井を明るく照らしている。朝らしい鳥の鳴き声も聞こえる。

僕はソファにあおむけになったまま、アーとかウーとか、そういうわけの分らない呻き声を漏らした。

「ごめん、まだアリシアの部屋」

「ええ？　お前、何してんの？」

「泊まった」

「へー、あんだけ散々俺の考察を否定してきてくれやがったわりに、実行に移すのは早いじゃないか」

「違う、そういうのじゃない！」僕は以前、ひとりエッチ疑惑をかけられた時と同じように飛び起きた。「お前なあ、どうしていつもそうやってなあ」

「いや、ちよつと待て、話はそこじゃない」

電話口からキンと響くニルスの絶叫にすっかり眠気も吹き飛び、僕は毛布を押しつけてソファにきちんと座った。何か忘れてたっけ、と寝起きの頭で必死に思考回路をまわしていると、そこにぐさりと矢が突き刺さるような声が響いた。

「今日、寮のみんなで野球しようぜって、お前が言いだしたんだぞ？ さつさと来ないと、もうみんな朝飯食ってるし、先に試合やっちゃまうぞ。戻れ馬鹿」

そこまで聞いて、あっ、と声をあげた。

我が大学の寮には僕が火付け役のベースボールブームが巻き起こっていて、何日かに一度、グラウンドにみんなが集まって野球をする。今日を指定したのは僕だ。しかも唯一のキャッチャーだから、抜けない。

やっべえ、と呟いたあと、「可及的すみやかに」と答えて、電話を切りかけたところではたと思い出す。

「ごめん、ちよつと待って」慌てて電話口に叫ぶ。

「何だよ、さつさと帰る準備しろよ」

「ニルスは、俺のこと、怒らないの？」

僕はすっかり間の抜けた声で言った。しばらくして、「はあ？」と、僕と同じぐらい素っ頓狂な声が返ってきた。

そして、思わず携帯電話から耳を離してしまうほどの大絶叫が飛ぶ。「馬鹿が、いつペン死んじまえ。もう十分追い詰めたんだから、自分のことだけ考えてろ。お前は魯鈍なお前らしく、行きたい方向向いてたらたら歩いてりゃいいんだ。競争じゃねえんだよ、ボケ」

がちやりと一方的に電話を切られ、無機質な電子音が鳴る。つい、ぼかーんと口を開けてしまう。このヒトほんとに僕の親友だったんだ、なんて今更な幸運に気付いてショックを受けてしまった。

まあ、今はそれどころじゃない。ガリガリと頭頂部を引っ掻きながら時計を見ると、もう朝の十時近かった。ここから大学まで、バスを乗り継いでも結構な時間を食う。一旦寮に戻って、動きやすい服装に着替えないといけないし、口スが多い。

盛大にため息をついてソファに崩れ落ちたと同時に、頭上から声が降ってきた。

「おはよう。何の電話？」

アリシアはソファの背もたれに手をついて、僕を覗き込んでいた。

すでに髪も服もすっかり整えられていて、自分が寝坊したことを恥じて赤面した。同様に「おはよ」と答えて、のっそりと起き上がった。

「ニルスだよ。今日、みんなで野球やろうって言うたの、忘れてた」

「ああ、たまにみんなで作ってるやつね」彼女は野球のことをあまり詳しく知らない。「私は嫌よ、土まみれになっちゃう」

「別に君を戦力に加えるとは思わない」

「そう言われると逆に冷たいわね」

肩をふるわせて笑うアリシア。彼女が持ってきてくれた紅茶を飲みながら荷物を整え、毛布をきちんと畳む。上着を羽織って髪を両手でぎゅとかきあげると、寝起きの髪が汗臭かった。寮に帰ったらまず風呂だ、とため息をついた。

「もう帰るの」

「早くしないとニルスにぶっ殺される」

アリシアはテーブルの上に放りっぱなしだった僕のキャスケットを手に取り、昨日と同じくフリスビーのように投げた。僕はそれを頭上でキャッチしながら、「乱暴に扱わないでくれよ」と笑いながら文句を垂れた。

「送って行くのか？」アリシアが腕を組んで得意そうに言った。「バスだと結構、時間かかるわよ」

「いいさ、これ以上君に借りを作りたくないからね」

「誓約書を交わさないギブ・アンド・テイクっていうのが一番美しいのよ。車を出すから、ちょっと待ってて」

アリシアは玄関ドアのすぐ脇にある小さな扉からガレージに出て行った。僕はそんな彼女の後ろ姿を見つめながら、永遠なんてものはどこにもない、と思った。

結局、最後には何もかもが壊れてしまうのだ。

だから清々しく忙しない朝の時間だって、ひとつひとつを噛みしめていかないといけない。いつか全てが壊れてしまうことを知ってい

て、無気力な僕はそれに意味を見いだせずに、目覚めるのが怖くて眠れなかった。

アリシアの家で寝起きするのは初めてだったけど、彼女と一緒にいることはほとんど当然のこと。ニルスも、レックスも、グレッグ先生も、故郷の友達も、みんな。それでもいつか必ず、僕らは離ればなれになってしまう。その日までとりあえず、寝て起きて、生きて、かわりばえのない日常にささやかな彩りを添えながら別世界を生きるだけだ。

エンジンの音が響く。突っ立っていた僕は玄関まで歩きだし、ドアを開けた。すでに庭先まで車を出していたアリシアが運転席から顔を出し、「ばーか」と叫んだ。ずいぶんと天気の良い朝だった。

昼前にキャシードラル・スクエアに来るのは初めてだった。かわいらしい鳥の鳴き声が響く、清々しい光景。人はまだまばらで、観光客も少ない。

アリシアはスクエアに沿った南側の道路に車を止めた。背後にでかい保険会社のビルが建っている。一か所に密集した木々の間からかすかに見えるキャシードラルを横目に、僕はふうとため息をついた。「何なのよ、ふーって」

「特に意味はない。ありがとう、送ってくれて」

運転席のアリシアに向きなおって笑うと、彼女も笑った。普段の男前さを前面に押し出した、どうしようもなく力強い笑顔だった。また子供扱いして僕の頭をぽんぽん叩く。

「さっさと行かないと。ニルスからまた連絡あるわよ」

はいはいと苦笑しながらその手を払いのけた。シートベルトを外しながら、キャシードラルを仰ぐ。覆い茂った葉の間から少しだけ見られる高い塔は、まだ低い太陽の光を背に逆光になって、ただでさえ怖じ気づきそうな神秘的雰囲気が一層際立っている。小さな鳥が横切った。光と鳥とキャシードラルが重なった時、あけっぱなしの

窓からふわりと風が吹いて、僕の短い前髪を淡く撫でた。

僕は、もつとここにいたい。もつとこの風を感じていたい。春の訪れを知らせる暖かい風を肌で受け止めながら、顔をほころばせた。目の前を車が通り過ぎていった時、僕は再びアリシアに向き合った。彼女は「降らないの？」と訊くように首を少しかしげている。

もう一台、車が通り過ぎるのとはほぼ同時に、僕はすうつと息を吸い込んだ。紡いだ言葉が車の音と重なってしまう。

「何？ 聞こえない」

「うん。俺、ニュージージーランドに残るよ」

一瞬だけ、その場を静寂が包んだ。車の脇を、観光客が謎の言語を話しながら歩いていく。彼らの声が聞こえなくなった頃、アリシアがくすくす笑い始めた。

「何がおかしかったの」

「ううん、ちよつとね」彼女は笑いながら言った。「不思議だなあって。あんだだけグダグダと悩んでたくせに、変わる時は人間変わるんだなーって」

「おいおいおい、どういうことだよ？」

「そりゃそうよ。何年新夢と一緒にいると思ってるの。あなたがどんだけ頼りなくて優柔不断で、へつぱり腰で、なっさけない白アスパラだつてこと、十分分かってるから」

「こらあ！」

自覚していることをすっかり並べられて、僕は運転席のアリシアに突っかった。彼女の頬を両手でつねると、きやあきやあ笑い転げながら暴れる。はしゃいだ彼女が後ろにひっくり返り、ドアの窓ガラスに頭を軽くぶつけた。「いったあ」と叫んだアリシアから慌てて手を離すと、前髪を強く引っ張られた。

しばらくそうやってじやれていたけれど、息が切れるようになってようやく僕は落ち着き、ほとんど折り重なるような状態で運転席でへばっていた。はあはあと浅い呼吸を繰り返しながら、僕は途切れ途切れに話した。

「日本語の、せんせい」

アリシアからの返事はない。彼女もまた僕の下で息を切らしている。
「聖ヴィラ・マリア高校の、日本語の、講師とか、出来ればいいな、
って」

「あー、あのちよつとしゃれた感じの、お嬢様の学校ね」

「そこで日本語を教えるんだ」僕は汗で額に張りついた髪をかきあげながら言った。「教育課程もとってるし、タイミングは悪くない」僕はアリシアから離れて、彼女の方を向くように助手席に座った。くたつと背をもたせたままのアリシアは、優しく笑いながら僕の話聞いてくれている。

「それで？」

「それだけだよ。だから日本には戻らない」

「一旦は戻るんでしょう」

「いや、しないよ。ご存知のとおり、優柔不断だから、決心が鈍ると困るし」

分かってるんじゃない、とでも言いたげにアリシアがふふんと笑った。僕はため息をついて、背もたれに肘をかけた。

笑っているけれど、彼女はきつと、安堵してくれているだろう。だから、もうあれこれ考えるのはやめた。あえて面倒臭いルートを選ぶことにする。

互いに静かに笑いながら、僕らは顔を寄せてどちらからともなくキスをした。昨日はただ触れ合うだけだったけれど、ほんの少しだけ舌先で彼女の唇を舐めた。一瞬、恋を知り始めたばかりの中学生のような気持ちでいた。そして、つまらないことだが、アリシアが僕のファーストキスの相手になってしまった。

そつと顔を離すと、僕は「それじゃ」と言って助手席のドアを開けた。窓がひらきっぱなしの枠を掴んで閉めようとした時、アリシアに呼び止められた。

「頑張つてね。何事も、自分で決めなきゃ意味がないから。好きなことをするっていうのは、勇気がいることなのよ」

運転席から僕を見上げて、あまり上手じゃないウインクをする。僕はぶつと吹き出して、そいつは時間がかかるな、と思った。

僕は窓枠を押してドアを閉めると、窓から運転席を覗き込んだ。

「なんとでもなるよ。多分ね」

「自信なさげじゃない」

「物事に、絶対とか永遠とか、そういうものは存在しないからね」

「屁理屈を言うな、日本人」

「べー、と舌を出すニョーギーランド人に、お返しとばかりに鼻で笑った。」

「僕はもう決めたからね、見つけたんだ。モチベーションを保ったまま、やりたいことを消化しながら生きていくだけだよ。君と比べる必要はない」

僕らはくすくす笑って、そして互いに手を振った。アリシアが運転席から窓を上げると、「またね」と車内から叫んだ。静かにかかるエンジン。彼女を乗せた日本車は、まださほど人が多くない緑いっぱいのシティ・セントラルの向こうへ、ゆっくりと走っていった。

その姿を見送って、目を細めた。僕はどうにもならない自分勝手だ。最後に一言、「君も頑張れ」とでも言えればいいのに。最後まで素直になれなかった。

けれど、別にわざわざ口に出す必要もなかったかな、とも思った。言葉は気まぐれだから、目に見えない力に手を加えなくてもいい。多分。

風がひとつ、僕とアリシアの距離を埋めるように吹きすさぶ。ふわりと暖かい、春の風。木々を揺らし、木漏れ日がきらきらと輝く。その光に、キャシードラルが姿を隠した。

冬が終わった。春が来て、夏が来る。世界がめぐりめぐっていく。踵を返し、キャシードラルに背を向けて、バス停の方角へ歩いていった。たくさんの人とすれ違ったけれど、誰も僕に見向きもしないけれど、僕はひたすら歩いた。最後まで誰も救わなかった、神様がいるかも知れない大聖堂を背に、足取り軽く。

大音量で車のクラクションが響く。正面から見慣れたワゴンが走ってきて、僕のちょうど右隣に一時停止した。

「やあ、アレン。休日の朝から元気なこった」

予想通り、レックスの車だった。食材や発泡スチロールのケースを大量に詰めたワゴンから顔を出し、窓枠に肘をついている。相変わらずのちよい悪オヤジスタイル。笑顔がまるで少年のよう。

僕は肩をすくめて苦笑したのち、

「ちよつと早いけど、メリー・クリスマス」

と答えた。

10 きみを好きでいてもいいですか（後書き）

高校時代、ニュージーランドに語学研修に行っていました。

新夢のいるクライストチャーチ教育大学とその寮は僕が実際に過ごした学校で、グレッグやニルス、アリシアとともに楽しく遊びあまり学ばず（笑）、のんびりと英語を勉強していました。

実際の人物には微妙に似て非なる感じで、でも団体・建物は実際にあります。

キャシードラルは写真で見るとよりだいぶきれいなので、ぜひ現地で見たいのですが。

ストリート・パフォーマーやデヴィルスティック売りのおっちゃん、いやーなつかしい。

特にホットドッグ売りのおっちゃんには、シティセンターに行くたびに小バカにされて（16歳なのに小学生と間違えられた日本人……）、でもやっぱりここで起用せずにはられない実在の人物ってことで。

彼だけはそのままです（笑）。

おそらくスクエアのガラスオブジェはもうなくなっているでしょうし、私が住んでいた頃と何もかもが今は違っていると思います。

それが寂しくもあり、当然だとひらきなおれることでもあり。（わけわからん

で、この小説はそのニュージーランドプチ留学から帰ってきてすぐにちゃちゃっと書いたもので、最終的な仕上げは1年ほど前にできました。

色々記憶漏れしているところもあるので、もしかしたら細かい記述で間違った部分があるかも知れません。見つけたらこっそり指摘してください（汗）。

文章のウマヘタよりも中身の面白さや新鮮さに集中していたので、それぞれのキャラやニュージーランドとの文化の違いなどをお楽しみいただけたら嬉しいです。

お時間とお金があればぜひ現地でも豊かな自然と楽しい人々に触れあってください。

■ 2011年2月22日に接して ■

阪神・淡路大震災の被災者だった私の耳に、クライストチャーチの大地震のニュースが当日昼、届きました。

すぐさま現地の友人たちに連絡をとってまわり、数人かはすぐに電話が通じ、多くは後になってぼつぼつとメールやFacebookの環境が復活し、ただ1人、いまだ連絡がとれていません。

テレビのニュースで自分が長いあいだ過ごした美しい町が廃墟と化している光景は、ショッキングなんていう一言ではあらわせません。安っぽく響きのいい言葉で飾り立てることも、最初から出来ないし、無理にやろうとしてもできません。

ただ、呆然とし、絶望し、気がつけば友人にメールを送りまくっていました。

学校の友達や先生はもちろん、ホームステイ先の人や町で仲良くなった友人たち、1人をのぞき全員の安全が確認されましたが、瓦礫の山を見ると今でも半泣きになります。

小説内に出てきたキャシードラルが腹からポツキリ折れている様が一番衝撃的でした。

描写されていたとおり、あそこには本当に神様がいるんじゃないかと錯覚させるほど美しく、荘厳で、祈りをささげずにはいられない素晴らしい大聖堂です。

こんなことで世界の宝を失うことになるうとは、誰が予測できたでしょう。

私はこの小説のタイトルに「キャシードラル・スクエア」という言葉を使いましたが、折れてしまったキャシードラルはもちろん、その前にあるスクエアにも巨大チェスやアリシアの店、ガラスのオブ

ジエなどがあり、さまざまな国籍の人がくつろぎ、動物がたくさんやってくる、憩いの場所です。

そこがM6.5の地震によって、もはや私が記憶し、小説の中に書いたような光景をすっかり失ってしまいました。悲しいなどという単純な一言では表現できません。

あの場所で暮らせたことをただ誇りに思うばかりです。

ガーデン・シティという名の通り、世界で最も美しい町のひとつであるクライストチャーチが、今回のような惨事に巻きこまれ瓦礫の山となってしまったことは、どの言葉を使って表現すればいいのかわかりません。

悲しく、遺憾で、自分の悔しさに泣きました。

日本を動けない自分が情けないです。

復興資金の寄付をしました。できれば同じお金でニュージーランドに飛び、友達にひとりひとり会いたい。だけど、願うしかありません。

心優しく素晴らしい人々がたくさんいるクライストチャーチという場所で震災が起こったなんて、今でも信じられません。

私が連絡先を知っている人に限らず、町で話しかけてくれた人、優しくしてくれた人たちが怪我していないか、亡くなっているはいないか、心配で仕方ありません。

願わくばこれ以上の被害者が増えないことを。

ガーデン・シティの素敵な人々と素敵な町が、今後も笑顔を支わずにいられることをお祈りします。

そして、なんという悲劇か、すでに亡くなられた100人以上の心優しい人々のご冥福を、心から、ただ一心にお祈りします。

どうかクライストチャーチが一刻も早く悲しみから解放されますように。

私は出国資金を溜めつつ、日本から援助をし続けます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8050k/>

キャッシュドラル・スクエアによろしく -New Zealand Dream-

2011年3月9日08時59分発行